

安 堂 遺 跡

1986年度

1987年3月

柏原市教育委員会

は　し　が　き

本書で報告する調査地は、かつて河内平野を潤した古大和川が石川の水を集め西北流する合流点にあたり、多くの街道が交錯する交通の要衝ということもあって、古来から多くの史跡、遺跡が知られている所です。政の中心・河内国府、多くの人々が集い喧騒を極めたであろう鰐香市、万葉集に謳われ古代の華麗な色彩を感じさせる河内大橋、信仰を集めた智識寺など古墳～奈良時代の遺跡は特に有名です。

しかし、こうした多くの遺跡は、地中に埋もれてしまい、私達の生活する場で往時の面影をとどめているものはありません。文献史料に登場するのみで、その実態や規模、ましてや位置すらも定かでないものが多いのが現状です。

近年、柏原市域は個人住宅やマンションなど、住宅地として開発が進み、それに伴なう発掘調査の実施によって原始・古代の市域の歴史が次第に解き明かされてきました。今回の調査でも、半城宮からもたらされた木簡が出土するなど、かつての河内国大県郡・智識寺周辺地域の歴史的な重要性が再認識されることになりました。

しかし、私達はこうした発掘調査の成果を手放しで喜ぶことはできません。一度開発が進み、また発掘調査を行なえば、遺跡は二度と元の姿に復することはないからです。私達発掘を担当する者の遺跡から託された重要な責務は、遺跡を保護し、必要な場合には調査を行ない、その成果を市民生活の向上や未来への展望の中に生かしていくことです。今後も、こうした責務を果すべく努力を重ねたいと思います。同時に、本書が市域の古代史解明に役立つことを願うものです。

昭和62年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は柏原市安堂町968-1番地におけるマンション建設工事に伴い、柏原市教育委員会が実施した事前緊急発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は高井興産株式会社 高井利三氏の依頼に基づくもので、発掘調査、整理作業に係わる費用は同社の負担による。
3. 発掘調査は昭和60年12月4日～昭和61年2月22日の期間行ない、整理作業は昭和62年3月31日をもって終了した。
4. 発掘調査は柏原市教育委員会社会教育課 竹下 賢、桑野一幸が担当した。
5. 遺物の実測、本書の編集・執筆・製図・写真は桑野が担当し、遺物の実測については石田成年、竹下彰子、製図については藤中優香が一部分担した。
6. 本書で使用した方位は全て磁北(真北は磁北から約6°東に偏している)、標高は全てT.Pである。
7. 木簡については奈良国立文化財研究所 田中 琢・鬼頭清明氏に御指導をいただいた。土塙6の木材については、同研究所 光谷拓実氏に年輪年代を測定していただいている。記して感謝の意を表します。
8. 調査、整理の参加者は下記の通りである。

| | | | | | |
|------|------|------|-------|------|------|
| 石田 博 | 北野 重 | 安村俊史 | 田中久雄 | 石田成年 | 谷口京子 |
| 竹下彰子 | 藤中優香 | 飯村邦子 | 村口ゆき子 | 福本理香 | 寺川 欽 |
9. 遺物に付した番号は、縄文土器、弥生土器、古墳時代の土器、奈良時代以降の土器、石器、上製品、木製品、屋瓦で区分し、それぞれの通し番号である。
10. 出土遺物、図面、写真は柏原市教育委員会 歴史資料館で保管している。木簡は現在奈良国立文化財研究所において保存処理中である。柏原市教育委員会 歴史資料館では「九月一日……」、「若狭国造郡……」、「近江国……」の木簡について複製を作製し展示している。また、弥生時代の木製品については元興寺文化財研究所において保存処理中である。その他のものについては歴史資料館で水漬け、PEG含浸し保管している。

目 次

はしがき

例 言

第1章 調査の経過

- | | |
|-----------------|---|
| 1. 調査に到る経過..... | 1 |
| 2. 調査の経過..... | 1 |

第2章 位置と環境..... 2

第3章 遺 構

- | | |
|-----------------|----|
| 1. 層 序..... | 4 |
| 2. 弥生時代の遺構..... | 4 |
| 3. 奈良時代の遺構..... | 7 |
| 4. 平安時代の遺構..... | 10 |

第4章 遺 物

- | | |
|----------------------|----|
| 1. 縄文時代の土器..... | 11 |
| 2. 弥生時代の土器..... | 12 |
| 3. 弥生時代の石器..... | 18 |
| 4. 弥生時代の土製品、木製品..... | 25 |
| 5. 古墳時代の土器..... | 27 |
| 6. 奈良時代の土器..... | 27 |
| 7. 平安時代の土器..... | 33 |
| 8. 屋 瓦..... | 34 |
| 9. 奈良時代の木製品..... | 35 |
| 10. 木 簡..... | 37 |

第5章 まとめ

- | | |
|--------------------------|----|
| 1. 縄文・弥生時代の調査成果..... | 40 |
| 2. 奈良・平安時代の調査成果と智藏寺..... | 41 |

挿 図 目 次

| | | | |
|----------------------------|----|----------------------------|----|
| 図1 調査地の位置 | 3 | 図16 弥生時代の石器(3) | 21 |
| 図2 調査区層序 | 5 | 図17 弥生時代の石器(4) | 22 |
| 図3 弥生時代の遺構 | 6 | 図18 弥生時代の石器(5) | 23 |
| 図4 土塹9、11実測図 | 7 | 図19 弥生時代の石器(6) | 24 |
| 図5 奈良・平安時代の遺構 | 9 | 図20 土製品 | 25 |
| 図6 井戸1、2実測図 | 9 | 図21 弥生時代の木製品(1) | 26 |
| 図7 土塹6実測図 | 10 | 図22 弥生時代の木製品(2) | 27 |
| 図8 繩文時代の土器 | 11 | 図23 奈良時代の土器(1) | 28 |
| 図9 弥生時代の土器(1) | 13 | 図24 奈良時代の土器(2) | 30 |
| 図10 弥生時代の土器(2) | 14 | 図25 奈良時代の土器(3) | 31 |
| 図11 弥生時代の土器(3) | 15 | 図26 奈良時代の土器(4)、平安時代の 土器 | 32 |
| 図12 弥生時代の土器(4) | 16 | 図27 屋瓦 | 34 |
| 図13 弥生時代の土器(5)、古墳時代の 土器 | 17 | 図28 奈良時代の木製品(1) | 36 |
| 図14 弥生時代の石器(1) | 19 | 図29 奈良時代の木製品(2) | 37 |
| 図15 弥生時代の石器(2) | 20 | 図30 木簡 | 38 |

図 版 一 覧

| | |
|----------------|--------------------|
| 図版1 調査地全景 | 図版9 弥生時代の土器 |
| 図版2 弥生時代の遺構 | 図版10 弥生・古墳時代の土器 |
| 図版3 弥生時代の遺構 | 図版11 弥生時代の石器 |
| 図版4 弥生時代の遺構 | 図版12 弥生時代の木製品 |
| 図版5 奈良・平安時代の遺構 | 図版13 奈良時代の土器 |
| 図版6 奈良・平安時代の遺構 | 図版14 奈良・平安時代の土器、屋瓦 |
| 図版7 奈良・平安時代の遺構 | 図版15 奈良時代の木製品 |
| 図版8 奈良・平安時代の遺構 | 図版16 木簡 |

第1章 調査の経過

1. 調査に到る経過

柏原市北郊は高尾山を頂部とする生駒山地南端部、通称東山の山地部と古大和川の氾濫原、東山から古大和川に流れ込む小河川によって形成された扇状地からなっており、山麓部ではブドウ栽培が盛んであった。近年市域は大阪のベッドタウン化が進むとともに、構造的不況はブドウ収益の減収をもたらし、農園の宅地化が一層進められている。最近では個人住宅とともに中、小規模のマンション建設が盛んである。一方下水道の敷設も進められており、こうした宅地開発、住環境整備に伴う土木工事に付随して発掘調査の件数も増加し、次第に当該地域の埋蔵文化財の状況が把握されるようになってきた。調査地周辺は古代史上著名な「智識寺」の南縁にあたり、また過去の調査でも土器包含層、遺構が知られていたことから、重要な遺構の存在が予想された。今回の調査は昭和60年11月、マンション建設に伴い提出された発掘届けに基づき、同月に柏原市教育委員会が依頼を受け、同年12月4日に着手した。

2. 調査の経過

調査対象地はほぼ方形で、東北部を空地としてL字形の建物が計画されたため、調査区も建物予定地に合わせL字形に設定した。調査面積は約620m²。掘削土置場の関係で、I区として北半部を調査し、埋め戻し後II区として南半部を調査した。I区は昭和60年12月4日～61年1月14日、II区は昭和61年1月16日～2月22日の期間調査を行なった。

I区では地表下約1.1mまで重機により上砂を除去し、以下の包含層を人力で掘削した。包含層は弥生時代～中世の遺物を含むが、上部はより中世の遺物が多い。地表下約2mで西流する自然流路が検出され、厚く堆積した砂層中から多量の繩文、弥生時代の遺物が出土した。

II区はI区の埋め戻し後、地表下約1mまで重機により掘削し、以下を人力で行なった。当初の予想に反し、調査区東南部では遺構面が浅い位置にあったため、遺構上面を十分に確認できなかった部分がある。またI区南端に検出された弥生時代の自然流路を確認するため、II区では調査区を東半部で北側に若干拡張した。

II区の調査では東半部に奈良時代の建物群、西半部に櫛列および木片・本筒などを投棄した土塊群などを検出した。本筒が出土した際には奈良国立文化財研究所 鬼頭清明氏が来訪され、種々の助言を得ることができた。奈良時代の遺構調査後、弥生時代の自然流路の調査に移り、繩文～弥生時代の土器とともに木製品の出土をみた。

II区調査後埋め戻しを行ない、調査結果の概要を依頼者に報告し発掘調査を終了した。

*調査区の設定に関しては図-3、5を参照。I区は1～4・A～C区。II区は4～6・A～E区。

第2章 位置と環境

調査地は大和川と南河内地域を南北に貫流する石川との合流点に近く、大和川の右岸に位置する。かつて大和川は大阪平野に入ると北西に流路をとっていたが(古大和川)、江戸時代に付替え工事が行なわれ、現在では調査地付近から西流している。大和川は調査地周辺で生駒山地にかなり接近する。柏原市域における生駒山麓の遺跡群は、古大和川と生駒山地の間に形成された氾濫原に臨み、扇状地性の低地上に営まれたものであり、調査地もこうした地理的環境にあたっている。石川との合流点付近、大和川の水面は現在T.P19.0m程であるが、調査地の地表面は約T.P18.0mであり、古大和川に対し低地に立地していたことが解る。

この大和川と石川の合流点の周辺には数多くの遺跡が知られている。先土器時代には羽曳野丘陵に藤井寺市国府、はさみ山遺跡があつて撲点的な集落の存在を窺わせるが、その他丘陵上、生駒山麓に点々と石器が発見されている。縄文時代には遺跡数が増加するとともに、時代が降るにしたがいより低地へ居住域が拡大され定住化が進む。前期の国府遺跡、晚期の船橋遺跡などは各時期の代表的な撲点集落と考えられるが、これらは、大和川左岸の羽曳野丘陵上の遺跡である。大和川右岸、柏原市域の小規模な遺跡群は、より北部の八尾、東大阪市域に形成された大形の集落と関係するものかもしれない。

弥生時代には船橋、国府遺跡を中心の中、小規模の遺跡が低地に群在している。大和川、石川にはさまれた玉手山丘陵では銅鐸の出土が伝えられ、大県遺跡を見下す山頂部からは多錠細文鏡が出土している。こうした祭祀遺物を周辺に配した一つの地域社会が形成されていたものと考えられる。調査地もこうした社会と血縁的に結びついた小規模集落の一部であった。古墳時代になると、この地域社会はより拡大する。古墳時代の各期を代表する玉手山、古市、平尾山古墳群が存在し、石川流域、河内平野中央部へと勢力は伸長した。船橋、八尾市・八尾南遺跡を中心とする低地帯は、地域の中心部であったものと思われる。この社会は単に血縁的、地縁的な農業社会であったばかりでなく、職能集団をも組み込んだものであり、羽曳野市北部、藤井寺市周辺に蟠踞した土師氏、柏原市大県周辺の製鉄遺跡などがこれを示している。

飛鳥・奈良時代以降は河内國の中心部として展開するとともに、平城京と西方諸国、大陸とを結ぶ交通の要衝として発展した。船橋、国府遺跡周辺には河内國府が置かれ、前代から続く有力豪族、渡来系の有力氏族は競って寺院を建立した。「続日本紀」に登場する聖武、孝謙天皇の参拝した河内六寺は、柏原市域の古大和川右岸に密集して建立された飛鳥時代後半期からの寺院である。調査地はこの河内六寺のうち智誠寺、家原寺の間にあたり、西には大和川の氾濫原が近くに迫っていたものと思われる。東には山地から派生する尾根が西下しており、この尾根上には奈良～平安期の大墓葬が営まれている。

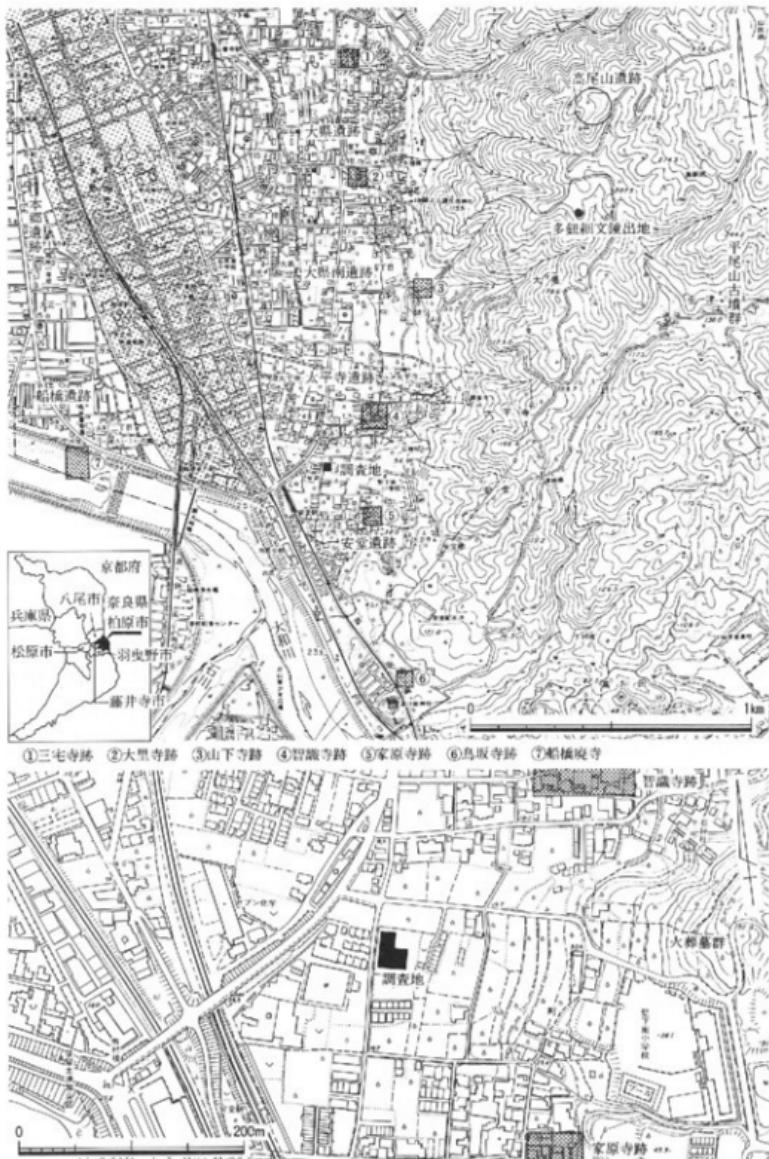


図-1 調査地の位置

第3章 遺構

今回の調査では弥生、奈良、平安時代の遺構が検出され、縄文～平安に渡る各時代の遺物が出土した。以下では本章で遺構、次章で遺物についてその概要を報告する。

1. 層序

1層は表土。2～5層は耕作土。これらの土層は調査区内にほぼ同一レベルで堆積している。6層以下で遺物が出土している。6層は弥生時代～中世の遺物が含まれるが、奈良～平安時代の遺物が多い。調査区全体に広がる。7～10層は6層同様各期の遺物を含むが、平安時代の遺物は少ない。7、8、10層は下に砂層が堆積している。以上の6～10層を包含層1とする。

砂層下の11層は弥生～奈良時代の遺物を含んでいる。砂質層で調査区西北部、溝1の南側に広がっている。包含層2とする。

12層は溝3の上部を中心に堆積する砂質土層で、若干の土師器片を含んでいる。土師器は小片のため時期を明確にできないが、第3最上部の砂層中には古墳時代の遺物を若干混在させており、同時代の上器片を含む堆積土であろう。

13層以下は無遺物層である。したがって、包含層1、2下の無遺物層上面をもって奈良時代以降の遺構面とする。弥生時代の遺構面については、同期の遺物を純粹に含む包含層が存在しないため明確にはできなかったが、弥生時代以前の遺物を純粹に含む溝3、あるいは溝8の上面に相当するとみることができよう。ただし東半部では溝3上面のレベル以上に各土壌の掘り込み面が存在した可能性が強く、奈良時代の遺構面とほぼ同一レベルにあったものと考えたい。

13層以下の無遺物層は、調査区東南部で安定した土層の堆積を示している。一方西北部では水の影響を多く受けたと考えられる青灰色土層、あるいは青灰色砂礫土層が広がり、比較的不安定な堆積状態を示している。このことは奈良時代以降においても同様で、西北部にはしばしば砂層の堆積をみることができる。

以上のような土層の安定度を条件として、遺構面は東南部に高く西北部に低くなっている。この部分に水が集中しやすく、水流を伴なう溝が存在していた。また東南部の安定した土層は調査区西南縁の溝8によって限界が示されている。おそらくこの安定した土層は、より東南方から舌状台地状に調査区内に派生しているものであろう。

2. 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構としては自然流路と考えられる溝、土塹、杭列？などが検出された。

溝3（図-3）

調査区のほぼ中央部、4A～4E区に検出された東西方向の溝である。最大幅4.8m、最大深

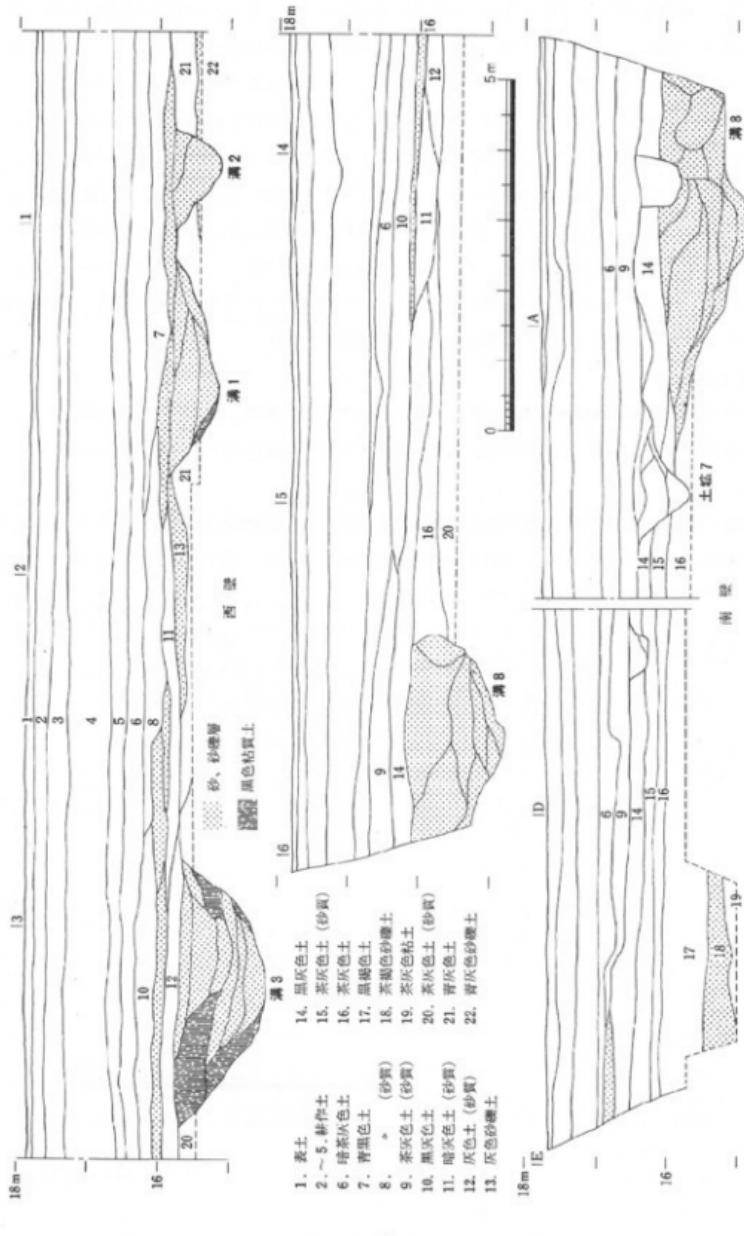


図-2 調査区解説

度2.0m。傾斜度は約3°で東に高い。自然流路かと思われる。溝内にはほぼ中央部に細砂、粗砂、砂礫が堆積している。掘り方と砂層の間には黒色粘質土が堆積する(図-2)。この黒色粘質土の発達からみて溝3の水量はそれ程多くはなく、一回は水流のない状態に近い時期があつたものと考えることができる。砂層、黒色粘質土層には多量の自然木が埋没していた。おそらく流路を覆うように両岸には樹木が繁っていたであろう。砂層からは縄文時代早・中～晚期、弥生時代中・後期、古墳時代の遺物が出土している。出土遺物の多くは弥生土器でⅢ～Ⅳ様式のものであり、次にV様式が多い。縄文土器は小破片、土師器は溝の最上部から小形壺が1点出土しただけである。堆積層の上、下によって遺物の時期を特定することはできなかった。モモ、ウリ、ドングリなどの自然遺物も出土している。図に示した網点は最後に堆積した砂層の範囲を示したものである。溝7は溝3に流れ込む流路である。

杭列(図-3)

溝3の北側肩部に径10cm程の小ピットが並ぶ。溝の北岸に堆積し、溝幅を狭める要因となつた黒色粘質土、砂質土の上にみられ、丸杭列であろうか。古墳時代以降の可能性もある。

溝8(図-3)

調査区西南端、6A区に検出された東南一西北方向の溝。最大幅2.9m以上、最大深度1.4m。溝3同様自然流路と思われる。溝内には粗砂、砂礫が堆積する。黒色粘質土の堆積、発達、白

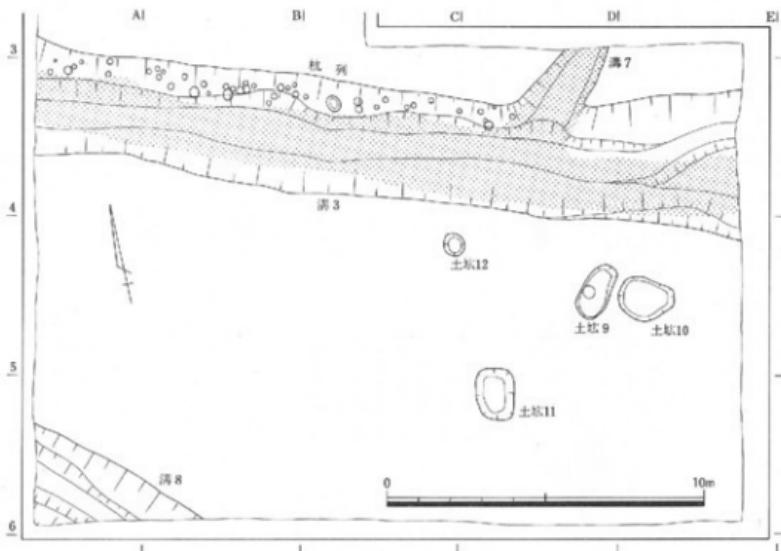


図-3 弥生時代の遺構

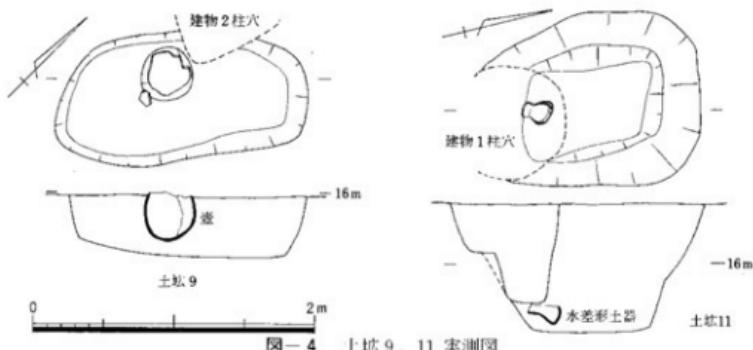


図-4 土塚9、11 実測図

然木の生育していたような痕跡はなく、溝3とは様相をかなり異にしていることからみて、一時の急激な流水、土砂の堆積があったと考えられる。下底部で板状の練泥片岩が出土している。数枚の剝離痕を残しており、石泡丁の原材を剥出した石核であろう。

土塚(図-3、4)

土塚9は最大長1.8m、最大幅0.9m、現存深度0.42mを測る長方形状の土塚。中央部西側辺寄りにⅣ様式の壺形土器がわずかに傾いた状態で置かれていた。口縁部は欠損している。

土塚10は最大長1.6m、最大幅1.3m、現存深度0.35mを測る長方形状の土塚。弥生土器の小片が若干出土したが、中央部を奈良時代の柱穴によって切られており遺物の状態は不明。

土塚11は最大長約1.5m、最大幅1.2m、現存深度0.9mの長方形状の土塚である。2段に掘り込まれていて、底面形はより長方形に近い。底部にⅢ様式の水差形土器が横倒した状態で検出された。この土器は半分を欠損しているが、出土位置、深度が奈良時代の柱穴の真下にあたるため、その掘削時に削られてしまったのではないかと考えられる。

土塚12は円形。径は0.65m、現存深度0.6m。底面から0.2m程浮いた状態で、横倒した甌の体部下半が出土している。

3. 奈良時代の造構

奈良時代の造構としては建物2棟、柵列、溝、土塚などがある。造構は調査区南部に集中し、しかも建物は造構面の最高所にあたる東南部に位置している。やや低地部にあたる西南部には掘立柱列が並び、柵列のような施設が設置されていたと考えられる。従来からの発掘、立会調査では、調査区西側の道路を挟み西方で厚く砂層が堆積し、造構の存在が知られていない(図-1)。したがって、こうした柵列を手懸りとして遺跡の西限を考えていくことができるものと思われる。

掘立柱建物(図-5)

掘立柱建物 1 は調査区東南部、4～6・D区にある桁行4間(7.8m)×梁行2間(4.2m)の南北棟の建物である。柱間寸法は桁行1.95m、梁行2.1m。南辺から一間目の中中央部にも柱穴が遺存し、間仕切りのためのものと考えられる。柱穴の掘形は一辺0.7～1.1mの隅丸方形を呈し、直径25～30cmの柱痕跡がみられた。掘方内には8世紀代と思われる土師器片が含まれているため、奈良時代の建物と考えたが、遺物からは細かい時期は不明である。

掘立柱建物 2 は建物 1 から東南にわずかにずれた位置にある。桁行4間(7.7m)×梁行2間(4.3m)の南北棟の建物である。柱間寸法は桁行1.93m、梁行2.15m。柱穴の切り合いからみて建物 1 に後続するもので、基構や位置から考えると建物 1 の建て替えであろう。柱穴掘方は一辺0.8～1.0mの隅丸方形を呈し、直径25～30cmの柱痕跡がみられた。また建物 2 では間仕切りのための柱穴がみられず、内部の模様が一部変更されている。柱穴掘方内からは土師器小片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

柵列(図-5)

調査区南西部、4～6・A区に南北に連なる掘立柱列が2列あり、柵列1、2とした。

柵列 1 は9.7m遺存しており、南北両側に延びる可能性がある。柱間は約1.6m。一辺0.45～0.7mの隅丸方形あるいは円形の掘方で、一部に柱痕を残す。柱痕は断面円形で直径11～17cm。底面が平坦なものと、やや尖った数枚の切削面で構成されるものとがある。

柵列 2 は7m遺存し、北側に延びる可能性がある。柱間は約1.7m。柱穴掘方は一辺0.5～0.8mの隅丸方形で、内部に直径約20cmの柱痕跡を残している。

溝(図-5)

溝 1 は最大幅1.8m、最大深度0.8mの東西方向の溝である。粗砂、砂礫が堆積し、南側には黒色粘質土の発達が認められる。そこには自然木が倒れ込んでいた(図-2)。自然流路と思われる。砂層からは弥生～奈良時代の遺物が出土した。8世紀後葉以後の遺物は含まれず、奈良時代中葉に埋没したものかもしれない。

溝 2 は最大幅0.7m、最大深度0.45m。粗砂が堆積し、弥生～奈良時代の遺物が出土(図-2)。

溝 5 は最大幅0.2mの浅い溝で、柱穴によって切られている。溝 6 は上塙 7、8 を繋ぐように掘られた南北方向のもので、最大幅0.5m、最大深度0.6m。溝底は南に高く、中央部に直径10cmの小ピットが残っていた。少量の土師器片が出土。

土塙(図-5)

土塙 1 は最大長2.2m、最大幅0.7m、最大深度0.8mの長楕円形の土塙。8世紀中葉の土器、丸瓦が出土するとともに、木片が堆積していた。溝 4、土塙 6 と類似する施設である。

土塙 2 は最大長1.8m、最大幅1.05m、最大深度0.43mの長方形状のもの。遺物は出土していない。土塙 3 は調査区北壁部分にあたり法量の詳細は不明。

土塙 7 は長さ2m以上、幅1.4m以上、深さ0.8m以上のもので、8世紀の土器が出土。土塙

8は最大長約2m、最大幅約1.6m、最大深度1.6mの土塙で、2段に掘り込まれ上面は方形、底面は円形を呈す。弥生土器、石鏃が出土したが、出土遺物のはほとんどは上層器小片である。土塙8は溝4に切られ、土塙7とは溝6によって連接している。

溝4、土塙6(図-5、7)

溝4は4～6・B区に検出された最大長約8m、最大幅1.7m、最大深度0.3mの浅い溝であ

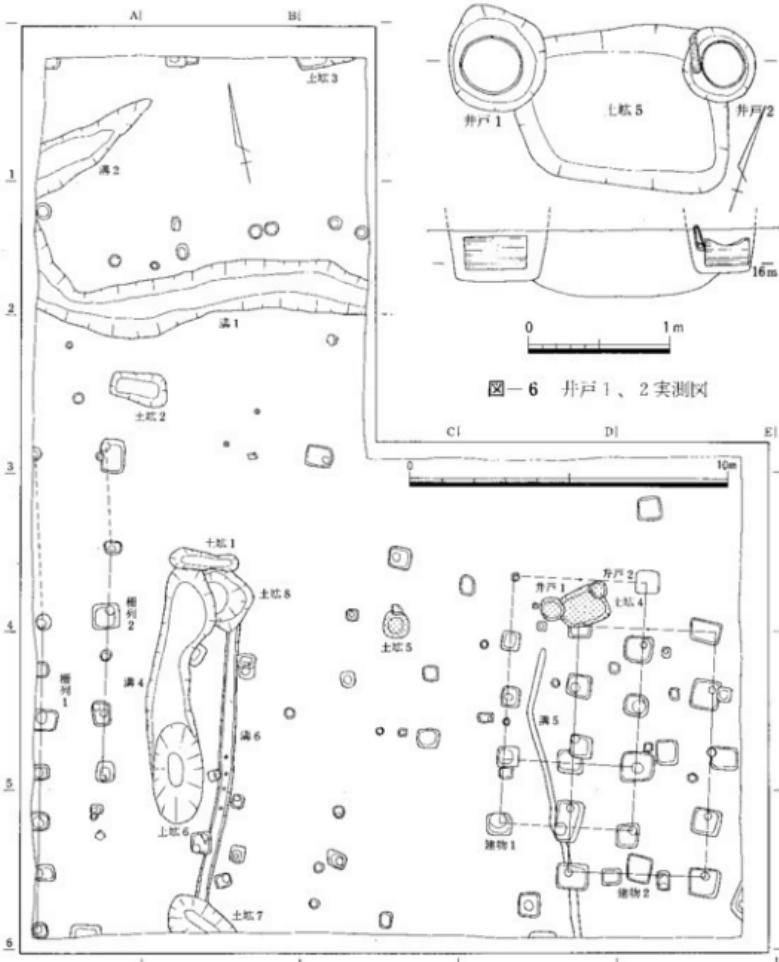


図-5 奈良・平安時代の遺構(網点は平安時代)

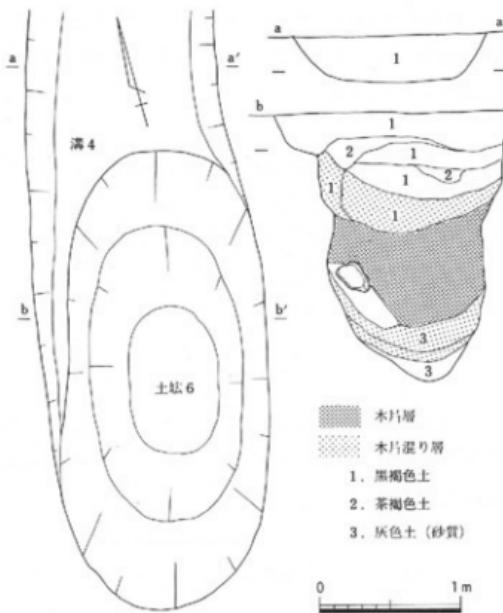


図-7 土塚6実測図

どの自然遺物が出土した。本片は槍鉋、手斧などの削片である。溝4は朱の繪布された1辺10～11cmの角材などの木片を含み、8世紀中葉までの土器が出土している。

4. 平安時代の遺構

土塚（図-5、6）

土塚4は最大長1.5m、最大幅1.15m、深さ0.5m以上の長方形の土塚で、井戸1、2によつて切られている。瓦器・楕など11世紀末葉の土器が出土している。土塚5は直径0.8mの円形の土塚で、最大深度は0.65m。瓦器・楕が出土している。

井戸（図-5、6）

4 D区から曲物を下底部に置いた円形の井戸が2基検出された。井戸1の掘方は直径0.7m、深さは0.4m以上。曲物は長径44.5cm、短径40cm、高さ23cm。井戸2の掘方は直径0.5m、深さ0.3m以上。北側から掘方と曲物の間に直径約5cmの木管が斜めにさし込まれていた。曲物は長径34cm、短径30.5cm、高さ20cm。2基の井戸は下底部に一段だけ曲物を利用したものであろう。井戸1からは12世紀前葉の瓦器・楕が出土している。

る。土塚6は溝4の南端に掘り込まれたもので、最大長3.4m、最大幅1.45m、最大深度1.54m、長椭円形を呈す。溝4と土塚6の掘削の先後関係は必ずしも明確ではないが、溝4掘削後に土塚6が掘られ、土塚6の埋没後に溝4内に土砂が堆積したものと思われる。土塚6は塙底に土砂が堆積し、その後木片を混じた土砂が堆積し、さらに木片が単時間に投棄され、その上を土砂が覆うという埋没過程を示す。天平18年(746)の墨書きがある木筒を始めとして6点の木筒、木製品、桃・ウリ・クルミ・栗・ヒョウタンな

第4章 遺物

1. 縄文時代の土器

縄文土器は溝3から弥生土器と混在して出土した。早期、中期～晚期のものがある。

1は早期の山形押型土器。下半部には原体を用いたと思われる縦方向の条痕がみられる。

2～5は中期の土器。2は前葉、3は中葉、4・5は後葉のもの。2はキャリバー形の口縁部を陸帯で飾る。4は北白川C式に平行する段階のものであろう。

6～15は後期の土器。沈線と縄文で曲線、直線的な文様を配した土器群である。6は初頭の中津式、8～15は前葉～中葉の北白川上層式に対応するものと思われ、後葉の土器は出土していない。15は浅鉢。10の土器は器面の剥落が著しいが、沈線間に縄文をもつものであろう。7は口唇部に細い縄文帯があり、以下に細い沈線で区画された曲線的な磨消縄文をもつ。

16～19は晩期の土器。16は中葉、17～19は刻目突帯文をもつ後葉～末葉の土器。16の器面は卷貝条痕。19は最終末の長原式段階であろう。

いずれも大粒の石英粒の目立つ暗茶褐色～明茶褐色の土器であるが、中期の土器は石英粒が多く、後期以降の土器は雲母、角閃石が多い。



図-8 縄文時代の土器

2. 弥生時代の土器

弥生土器は多くの遺構、包含層から出土している。いずれも中期～後期のものである。ここでは弥生時代の遺構出土のものについて報告する。

溝3・中期の土器（図-9～12）

出土した土器には壺A（1～4）、壺D（8）、受け口状口縁壺（5～7）、細頸壺、太頸壺（9）、無頸壺A（10、11）、高杯A（12、13）、高杯B（14）、器台（15）、鉢A（18～20）、鉢B・台付鉢B（21～30）、水差形土器（31、32）、甕（33～42）がある。

壺Aは廉状文、流水文などで飾られる。壺Dは口縁端面に一条の凹線を入れ、体部はミガキ調整される。受け口状口縁壺は口縁部に格子文がみられ、頸部には指頭圧痕、櫛圧痕のある貼付け突帯をもつ。細頸壺、太頸壺には円形浮文、櫛目文がみられる。無頸壺Aは直口、段状口縁のもので、口縁部には凹線文、廉状文が施される。

高杯Aは口縁が直立するもので、口縁部に刺突文、廉状文があり、ミガキ調整される。高杯Bには口縁部に凹線文が施されるものがある。

器台には凹線文がみられる。脚・台部片の16は高杯Bの脚部、17には凹線文がみられる。

鉢Aには無文のもの、口縁部を刺突文、凹線文で飾られるものがある。鉢Bには口縁部が短く外反するもの（24）、段状口縁で体部が屈曲するものがあり、前者は無文でミガキ・ハケ目調整、後者は波状文、廉状文、刺突文、凹線文などで飾られる。30は短い刺突を連続させ縄文状にしたもので、その間を凹線がめぐる。台付鉢も存在する。

水差形土器は刺突文、廉状文で飾られ、32の体部には縦方向にミガキを略文風に施す。体部は浅く下半の張りが強いもので、台付のものかもしれない。

甕には口径10cm以下の小形のもの、20cmの中形のもの、20cmを超える大形のものがある。口縁の形状には短く外反させたもの（35、37、38）、口縁端部を上下にのばしたもの（33、39、42）、端部に凹線を入れたもの（34）、端部を折り返したもの（40、41）がある。外面はハケ目、ミガキ調整、内面はハケ目、ミガキ、ナデ調整がみられる。

これらの土器は茶褐色で角閃石の目立つわゆる生駒西麓系のものであるが、5～8、10、15、20、27、29、34、42の土器は黄白色系で角閃石の目立たないものである。

器種、文様構成からみて溝3・中期の土器はⅢ様式（新）～Ⅳ様式（古）段階の土器群である。

溝3・後期の土器（図-12）

壺A（43、44）、長頸壺（45、46）、短頸壺（47～49）、高杯A、甕（50、51）が出土している。

壺Aは頸部が短く、口縁部に円形浮文がみられる。長頸壺には内外面をハケ目調整されるものと、外面をミガキ調整されるものがある。短頸壺には体部中央に最大径のあるもの、下半に最大径がくるもの、口頸部径が小さいものなど多様な器形がある。甕の口縁は受け口状になるもので、体部にはタタキ目調整が施される。

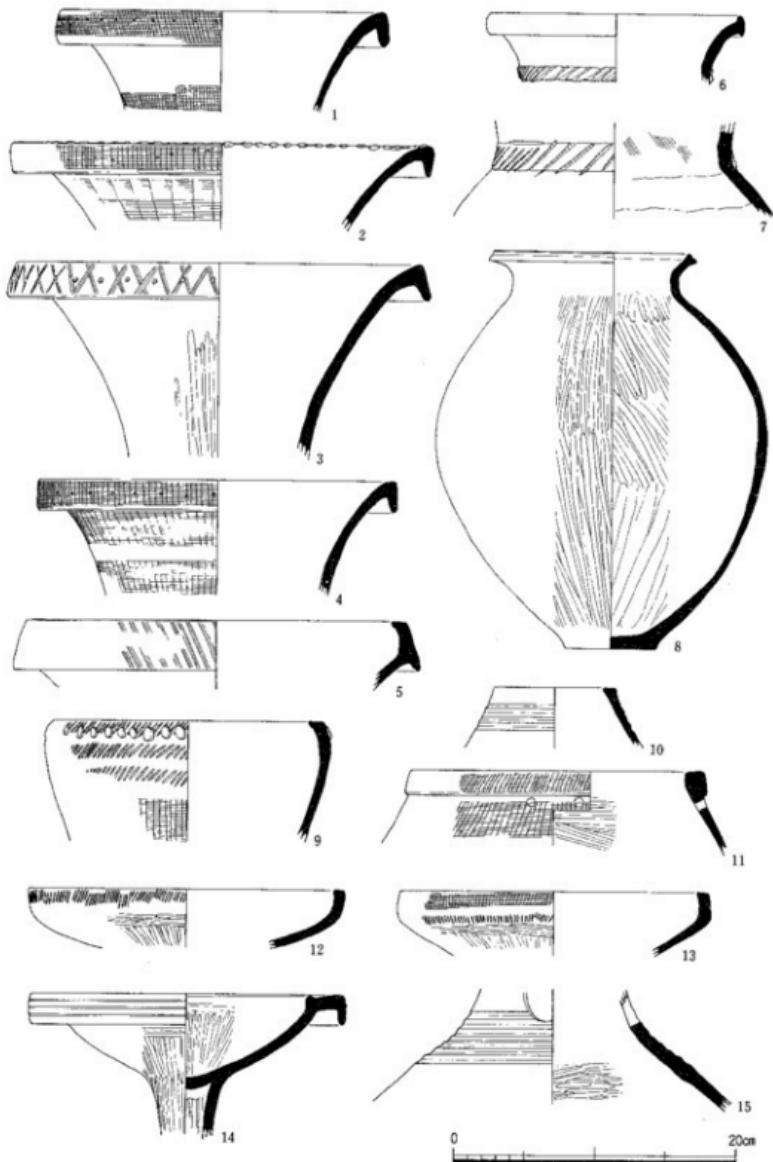


図-9 弥生時代の土器(1)

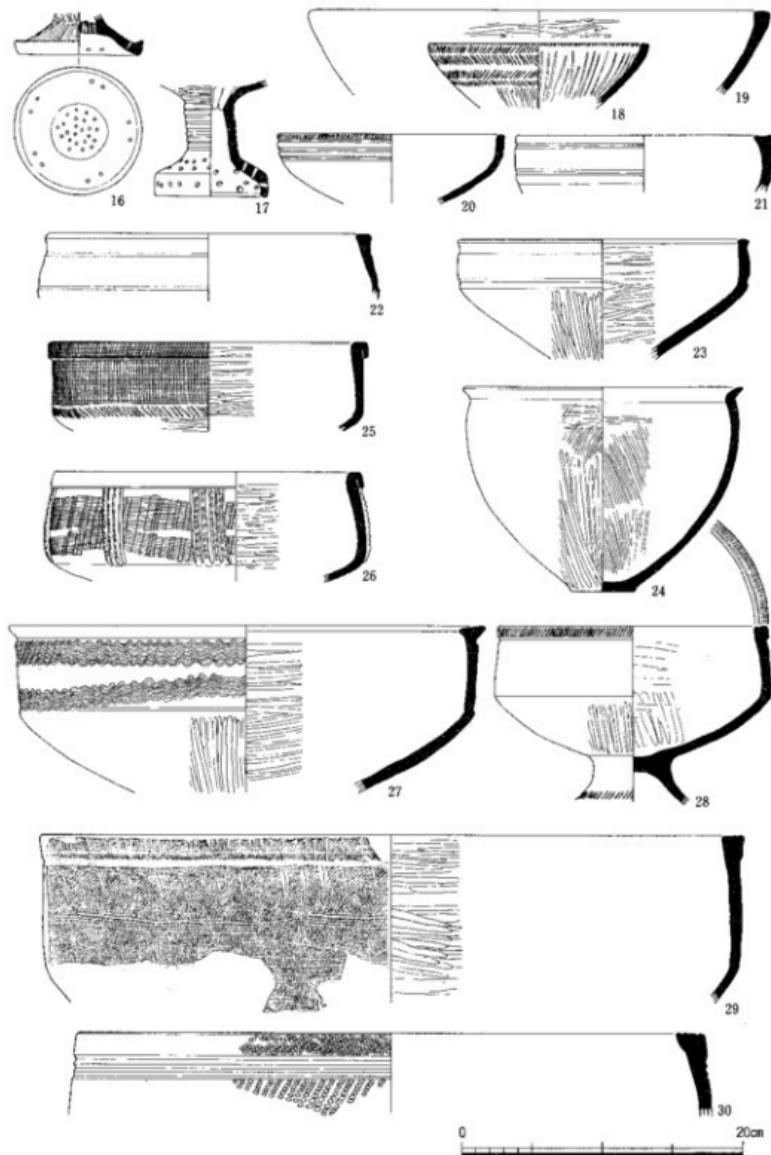


図-10 弥生時代の土器(2)

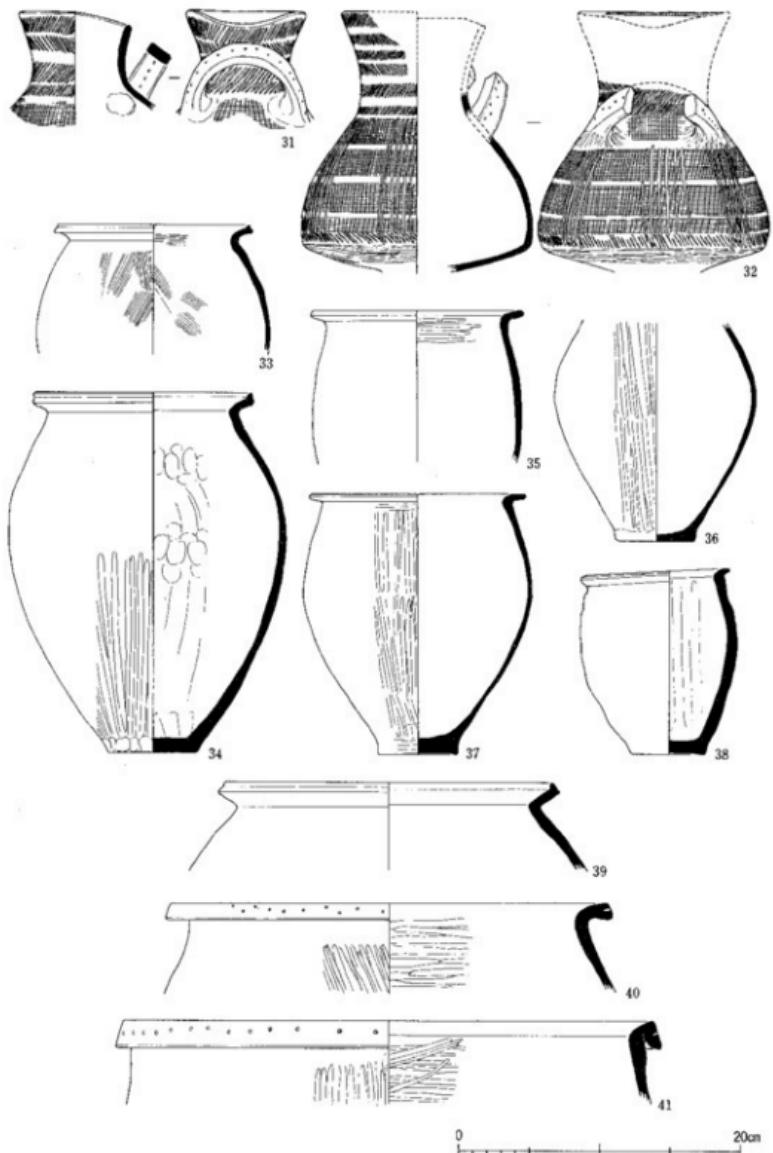


図-11 弥生時代の土器(3)

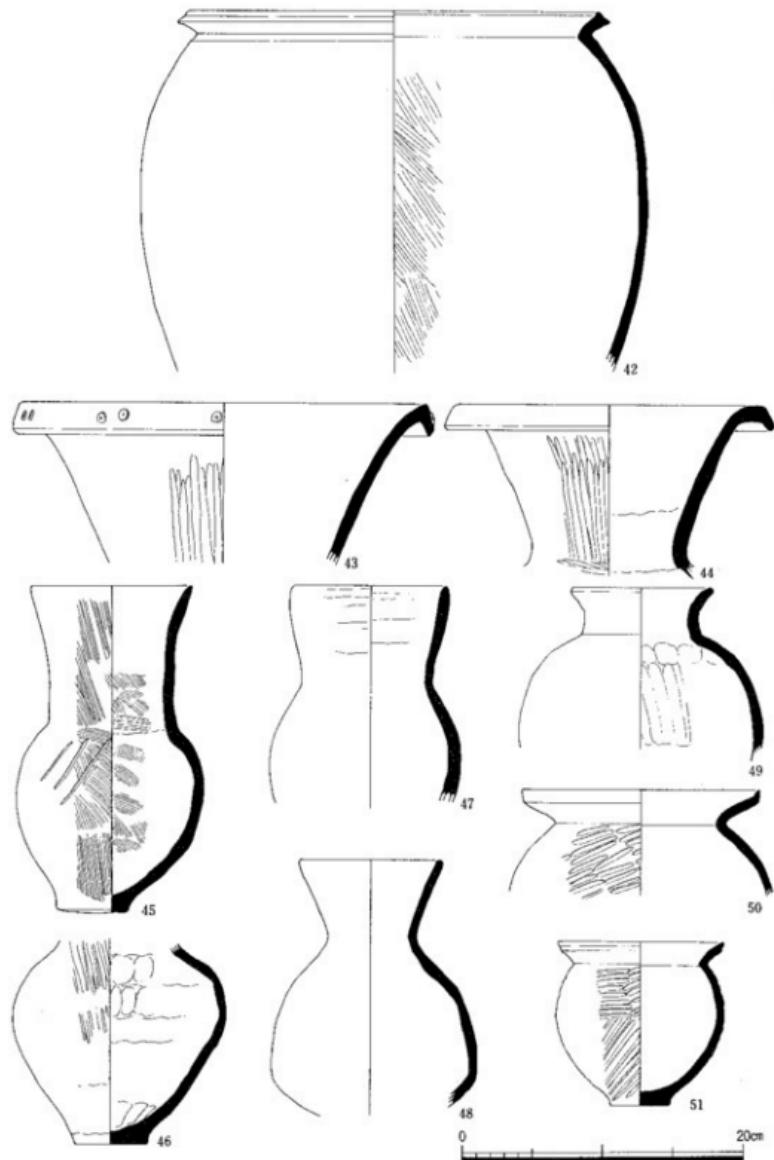


図-12 弥生時代の土器(4)

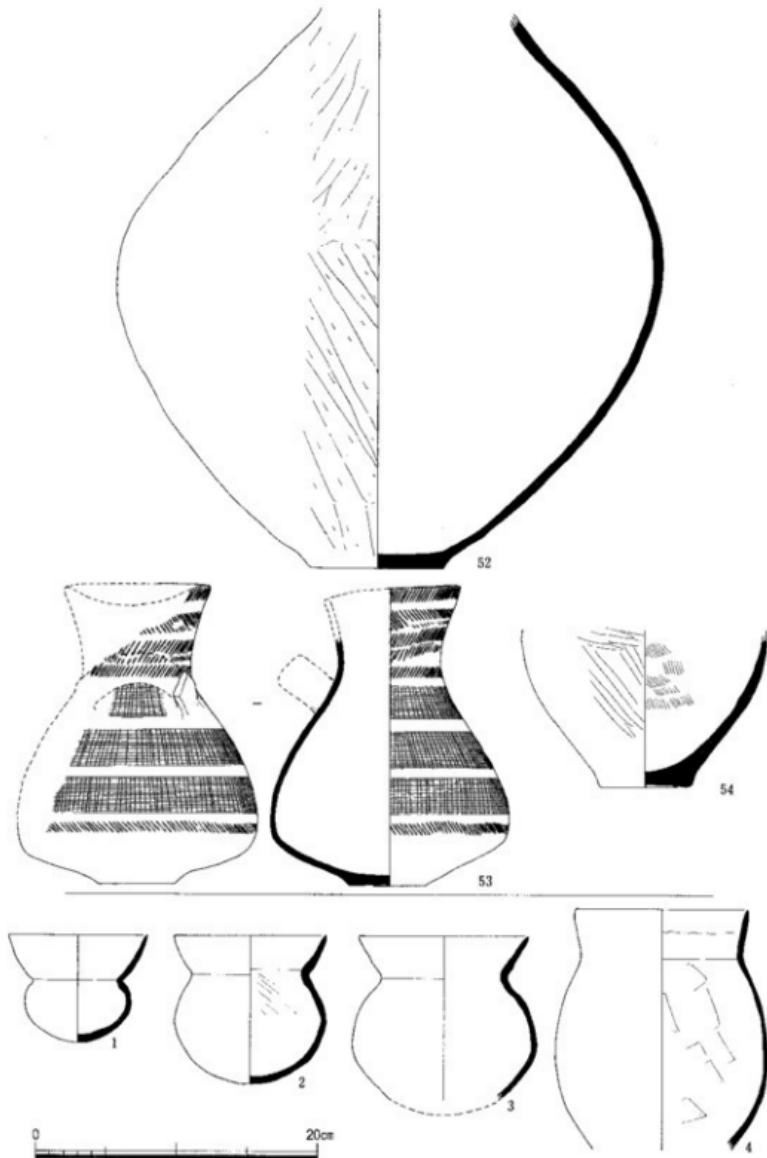


図-13 弥生時代の土器(5)、古墳時代の土器

これらの土器はいずれも生駒西麓産のものである。

土塙出土の土器（図-13）

52は土塙9出土のもの。壺CあるいはD。灰白色を呈し、角閃石は目立たない。53は土塙11出土の水差形土器。生駒西麓産。54は土塙12出土の壺底部。

*土器の名称については『弥生式土器集成 本編2』、『恩智遺跡I』を参考にした。

3. 弥生時代の石器（図-14～19）

大半は溝3から出土した。溝3には櫛文土器も混在しているが少量のため、ここでは弥生時代の石器とし、包含層、土塙等出土のものも一括して報告する。

石鎌(1～5)、同未製品(6、7)、石槍(8～10、13～16)、同未製品(11、12)、石錐(17、18)、櫛形石器(19～21)、削器(22～26、28)、搔器(27)、石庵丁(29～31)、同未製品(32、33)、叩石(42)、石核(34～39)、剝片、碎片が出土している。

石鎌には有茎のものと無茎のものがあり、未製品は横長剝片を素材としている。

石槍には小形のものと大形のものとがあり、大形のものには幅が狭く厚いものと、幅が広く薄いものとがある。未製品も両者に対応するものであるが、加工途中で破損している。折れ面からの剥離痕が残っており、石核として再利用された可能性がある。

石錐には体部～刃部の縁辺が内湾するものと直線的なものとがある。

櫛形石器は上下の対向する縁辺に細かい平坦、階段剥離のみられるもの。側辺に桶状の剥離痕をもつものはなく、横長剝片を素材とするものが存在する。

搔・削器には抉入搔器(27)、單刃削器(25、26、28)、複刃削器(22～24)がある。素材には横長剝片が基本的に用いられているようだが、一部には縱長剝片、小形偏平礫が用いられている。また表面に自然面を残しているものが多い。

石庵丁は片刃、直刃のもの。未製品および大形石庵丁の未製品がある。

石核には角柱状の母岩の2面に作業面を設定し、一面は上下に打面転位しながら縱長剝片を剥離し、他面は横方向に打点を移動しながら横長剝片をとるもの(34)、板状の母岩の小口面に作業面を設定し横長剝片を剥離するもの(35、36)、同じく板状の素材の平坦面に作業面を設定し、側辺をめぐるように打点を移動しながら横長剝片を剥離するもので、作業面が1面のもの(37～40)、2面のもの(41)などがある。また石庵丁の素材をとった石核もある。

5の石鎌はチャート、叩石は砂岩、石庵丁は綠泥片岩、その他はサヌカイトである。

石鎌、石錐などは比較的小形の剥片石器であり、搔・削器、小形石槍などは比較的大形の剥片石器である。出土した石核は、残核の状態からみれば小形剝片の剥離を目的とするもので前者の石器群に対応するとすれば、後者についてはどのような石核が想定されるだろうか。搔・削器の表面に自然面を残すものが多い点が注意される。小さな母岩を使用し、一つの剥離面が

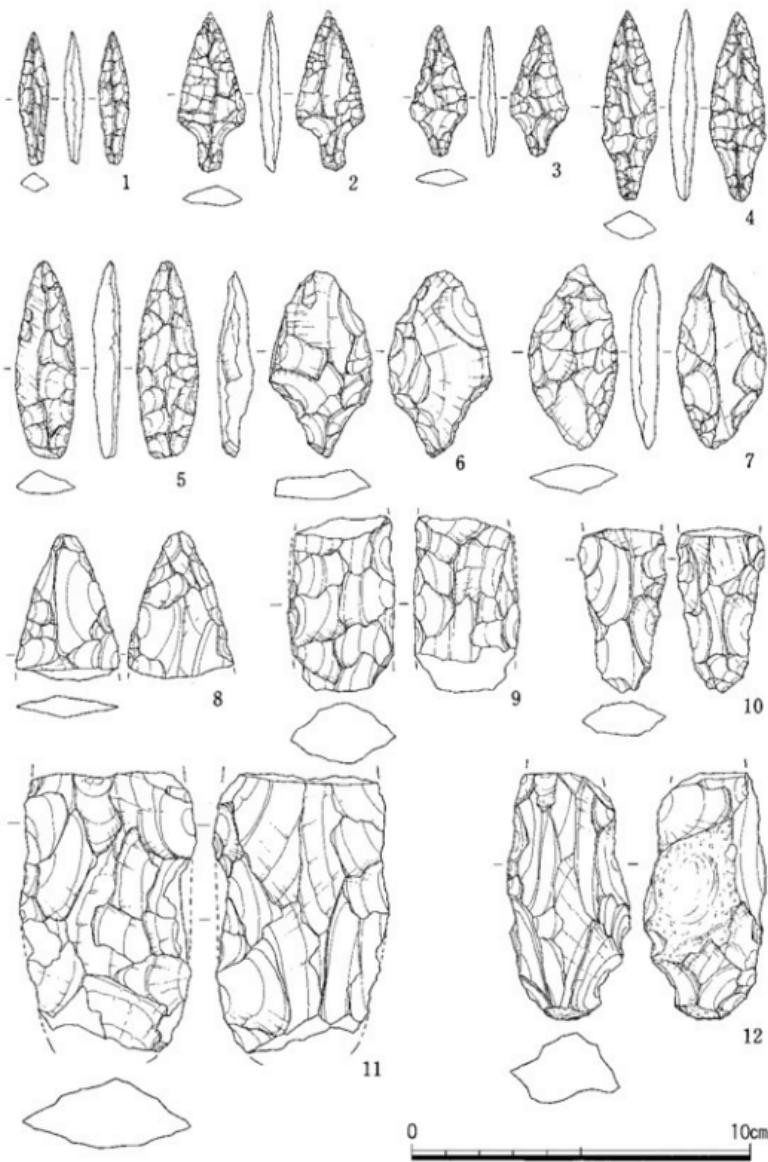


図-14 弥生時代の石器(1)

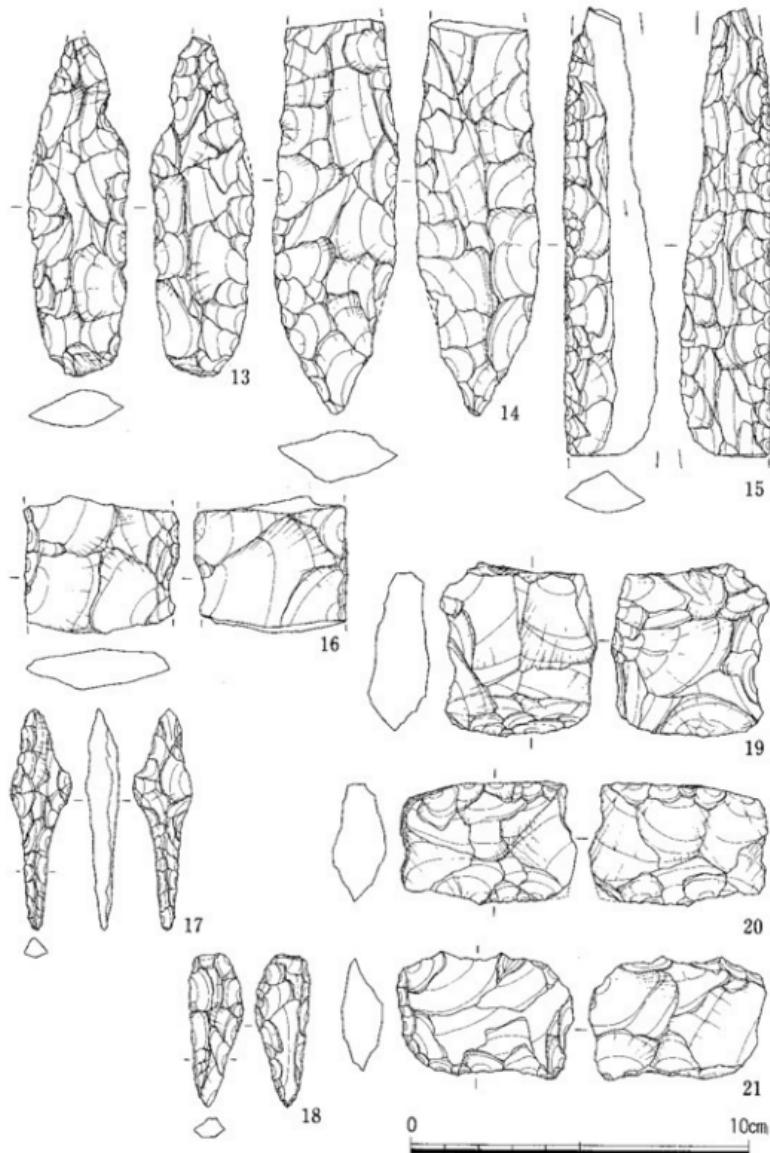


図-15 弥生時代の石器(2)

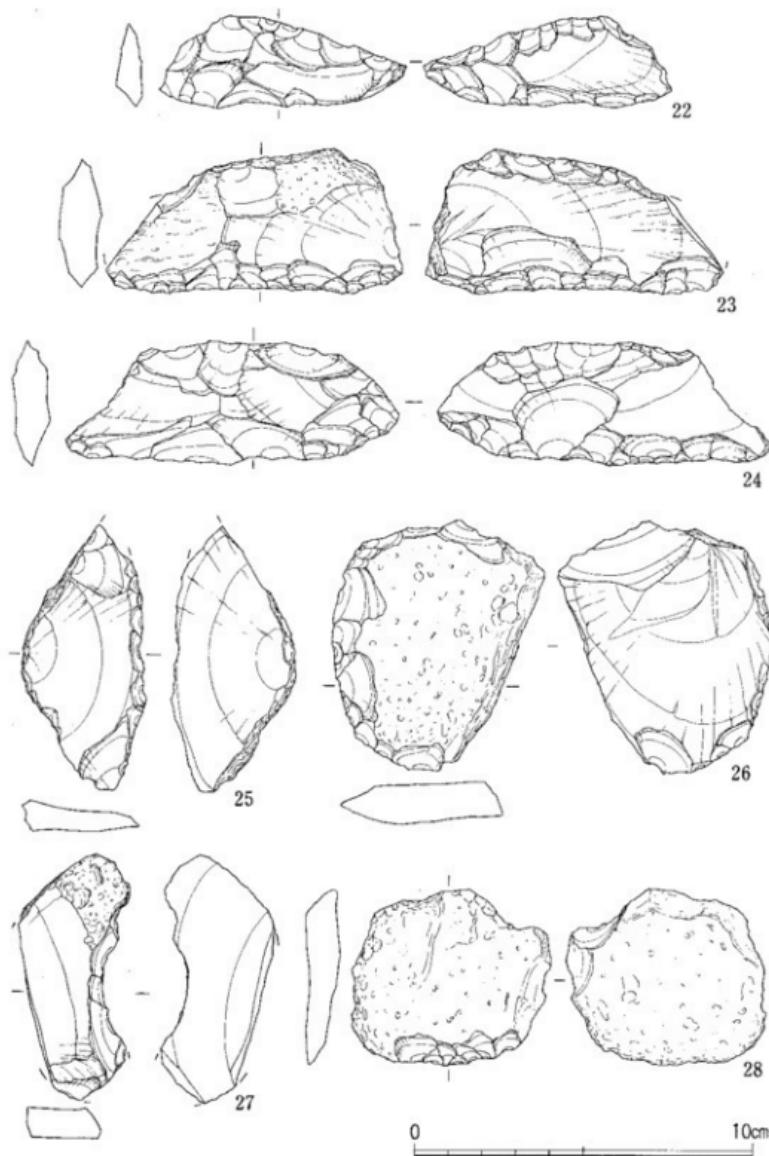
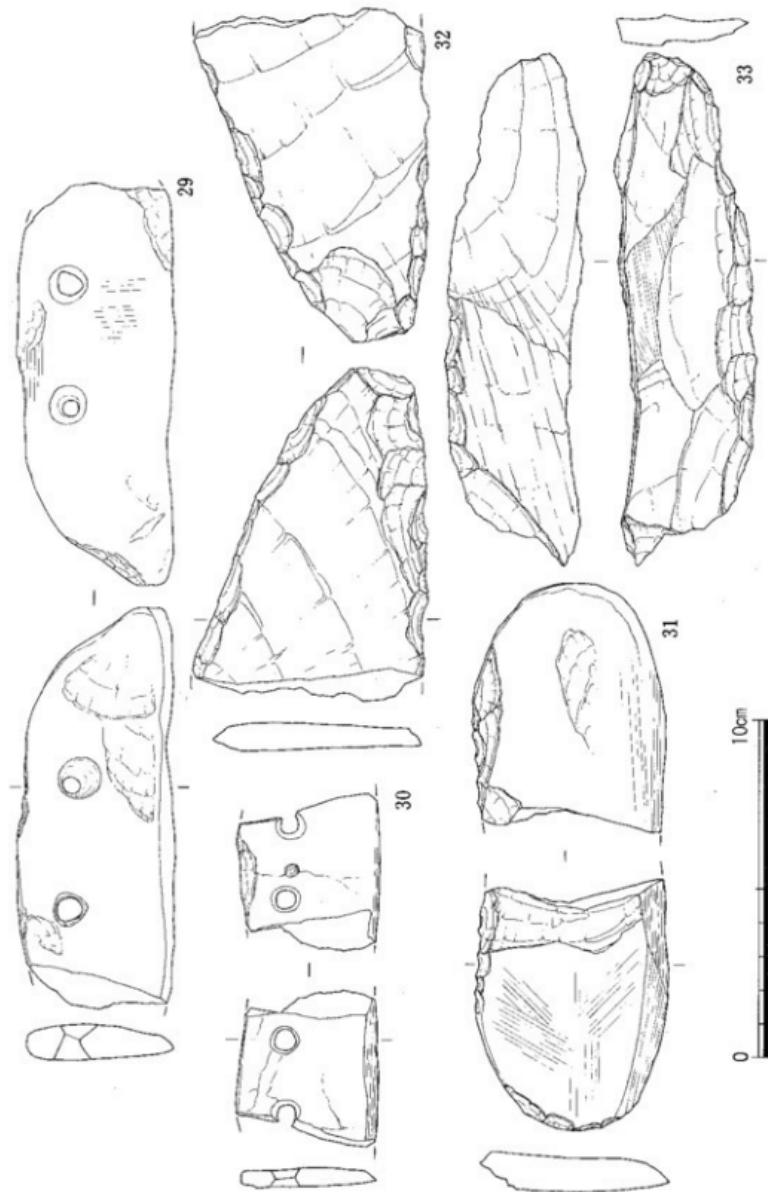


図-16 発生時代の石器(3)

図-17 弁生時代の石器(4)



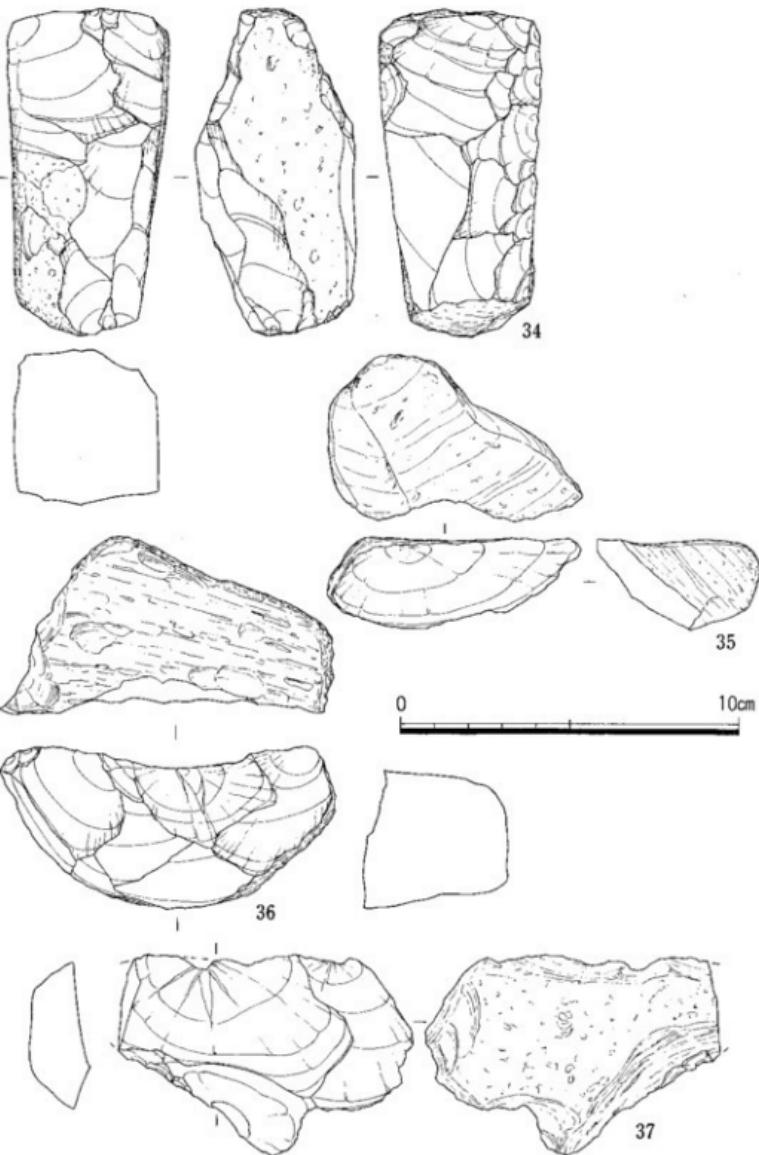


図-18 弥生時代の石器(5)

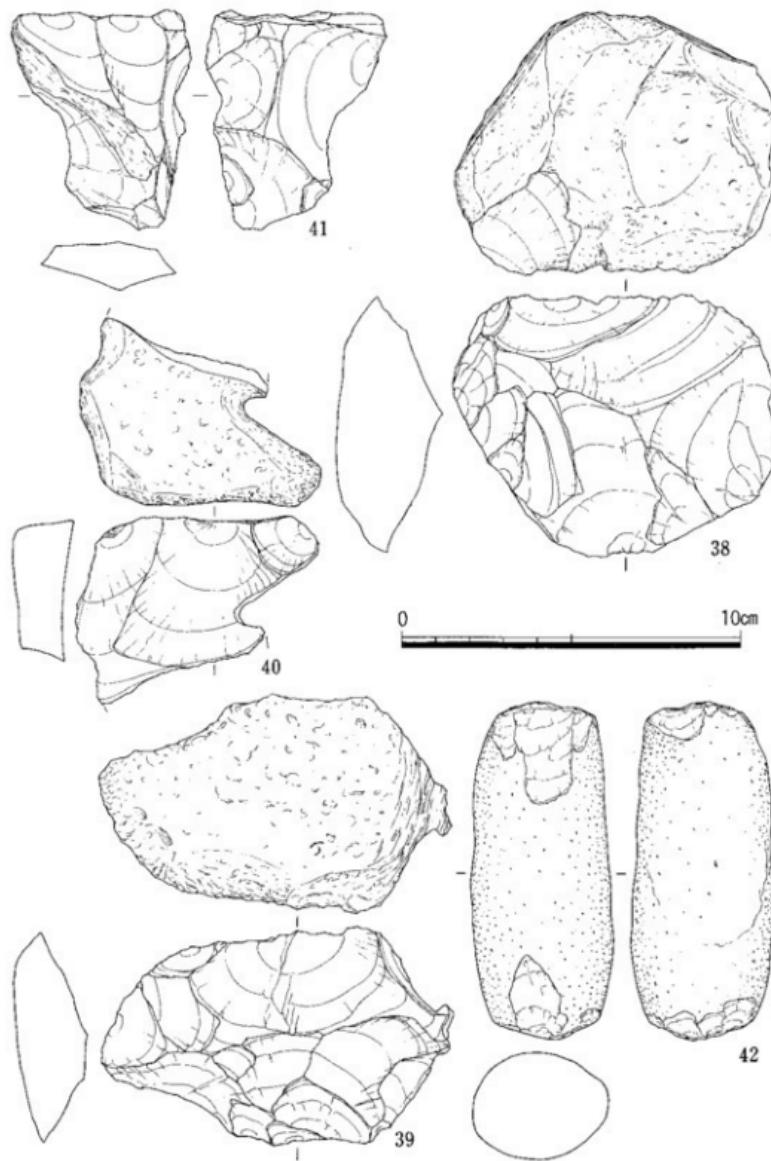


図-19 弥生時代の石器(6)

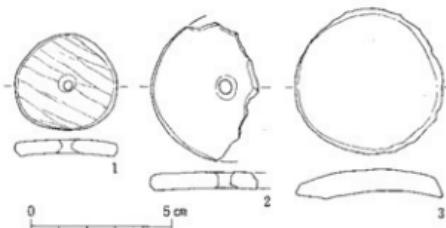


図-20 土 製 品

そのまま作業面の全体であるようなものは除くとしても、その他については初期段階では搔・削器等と十分対応できる大きさをもっていたものと考えられる。つまり、こうした石核では作業面上に自然面の残るような剥離作業の進行初期に（あるいは石核整形段階も含め）、搔・削器等の

素材を目的的剥片とする剥片剥離作業が行なわれたことを想定しておきたい。

4. 弥生時代の土製品、木製品

土製品、木製品ともに溝3から出土したものである。

土製品（図-20）

いずれも紡錘車で、3は未製品。1は7.9g、2は12.5g、3は24.6g。側面は研磨されており、紡錘車としては1は小形、2、3は中形の部類に入る。

木製品（図-21、22）

木製品表面はいずれも水流により磨耗しているため、加工痕は明瞭ではない。図示した他に溝底から長さ約1.1m、幅約15cmの板材が出土している。なお、断面図には本理を示した。

櫛(1)は現存長81cm、柄の直径3cm、水かきの現存幅8.5cm、厚さ1.6cm。柄の最大径は柄尻にあり、中央部で細い。水かきも最大幅は基部にあったものと思われ、先端に向って幅、厚さとともに細くなっている。水かきの先端部は折損。

広歫(2)。柄の現存長26.6cm、直徑2.6cm。身は現存長15.8cm、現存幅14.6cm、柄孔部の厚さ3.2cm。やや左寄りに柄孔があり、着柄角は前面に対し約75°。柄、刃部とともに焼失している。

組合せ鋤(3)は身部の長さ33.2cm、最大幅19.8cm、着柄部の厚さ2.8cm。身の平面形は長方形であるが、肩部、刃部ではわずかに幅が狭くなる。断面形は後面側にわずかに湾曲する。頭部に断面長方形の柄孔があり、その両側で基部から柄の方向に向け、長さ5cmの突起をもつ。着柄の柄受けの機能をもつものであろう。柄は身部に対し水平に付く。

櫛(5)は長径16.3cm、短径11.8cm、高さ3.5cm。内面に擦痕が残る。

楔状木製品(6)は長さ10.5cm、幅5.5cm、頭部の厚さ1.7cm。

柄状木製品(8)は現存長13.3cm。掘り部の幅3.3cm、厚さ1.7cmで断面は梢円形。縦状痕が残っており、燃紐状のものを巻いていたのかもしれない。

用途不明木製品(4)。現存長12.2cm、最大幅25.6cm、厚さ1.4cm。削板材を用い、身の平面形は側辺の内済する台形を呈す。4本の歯状部は折損。頭部に方形の刺込みがある。

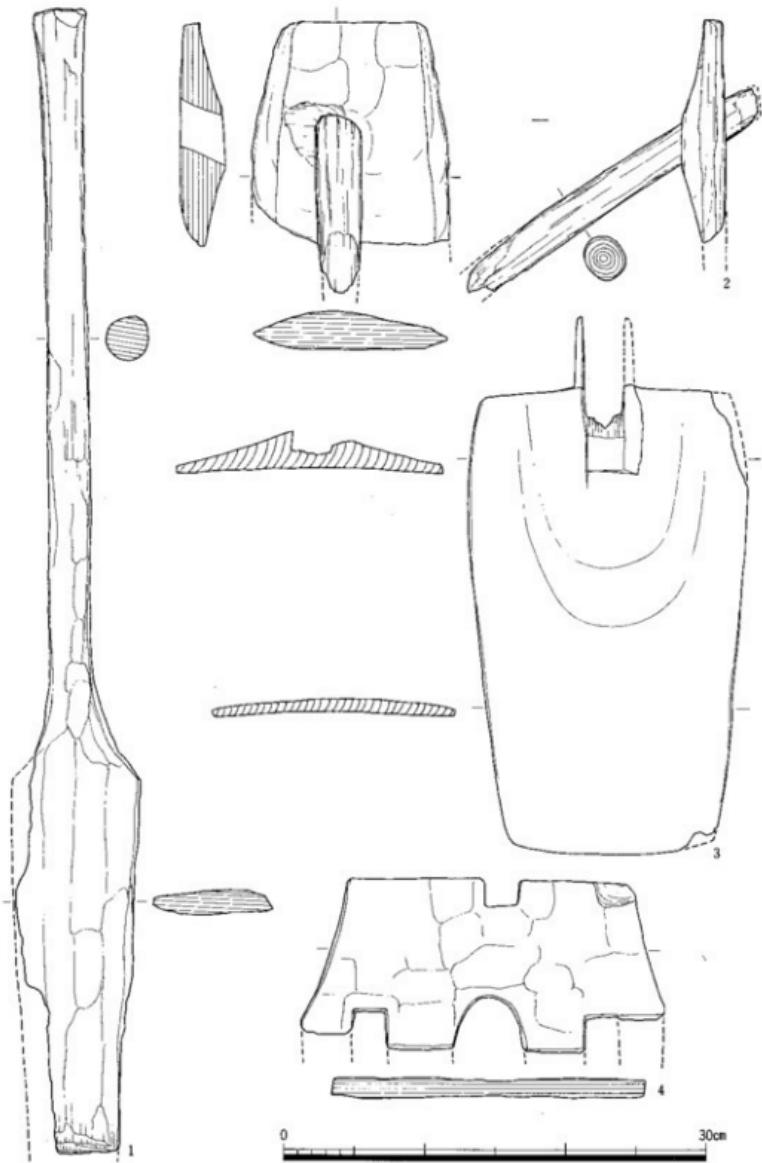


図-21 弥生時代の木製品(1)

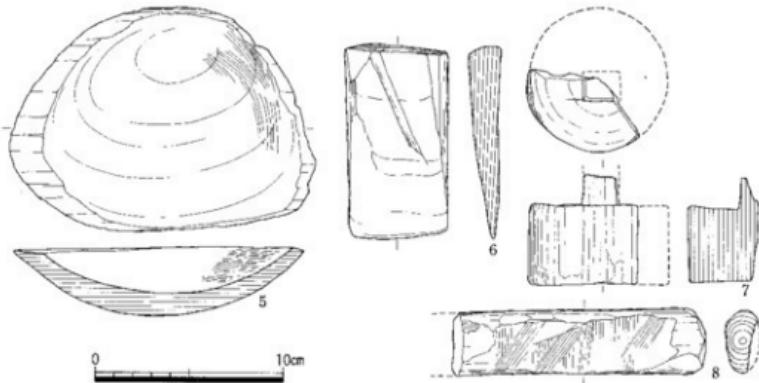


図-22 弥生時代の木製品(2)

用途不明木製品(7)。高さ約4cmの円柱材の中央に柄状の方形突起が付く。推定直径7.5cm。
櫂状木製品は針葉樹材。その他はカシなどの広葉樹材とみられる。

5. 古墳時代の土器 (図-13)

古墳時代の土器は、2は溝3最上部の砂層、その他は包含層1から出土している。

小杉丸底蓋の1はナデ調整、2は内面板ナデ調整、3はナデ調整、4の内面は浅いケズリ調整である。4の土器は体部、口縁部の径に大きな違いがなく、口縁部は直立する。いずれの土器も胎土の砂粒は比較的少ないが、石英、赤色のくさり礫が目立つ。

6. 奈良時代の土器

包含層出土の土器には器面の磨滅が著しいものが多いが、観察した範囲で記述する。

溝4・土塙出土の土器 (図-23)

土師器には杯、杯蓋(7)、椀、皿、高杯、鉢、鍋、壺、甕(17)、羽釜(19)、ミニチュア土器(10、15)、須恵器には杯、杯蓋、皿蓋(21)、甕(24、25)などがある。

土師器・杯は外傾する口縁部をもつもので、口縁端部を巻き込み口縁部外面をナデもししくは粗いミガキ調整、底部をケズリ調整、内面に螺旋+1段放射暗文のみられるものが多い(3~6)。口縁端部を内傾させて段をつくり、内外面をナデ調整するもの(1)、口縁部、底部外面を丁寧にミガキ調整、内面に螺旋+1段放射暗文+連弧文の暗文のみられるものがある(2)。皿は口縁端部を巻き込み、口縁部外面をナデ調整、内面に螺旋+1段放射暗文がみられる(8、9)。碗外面はミガキ調整(11)。高杯は螺旋+放射暗文がみられ(13)、脚部は8面取り(14)。鉢、鍋の外面はケズリ調整(12、18)。壺は把手付きの短頸壺(16)。淡褐色~灰白色のものが多い。

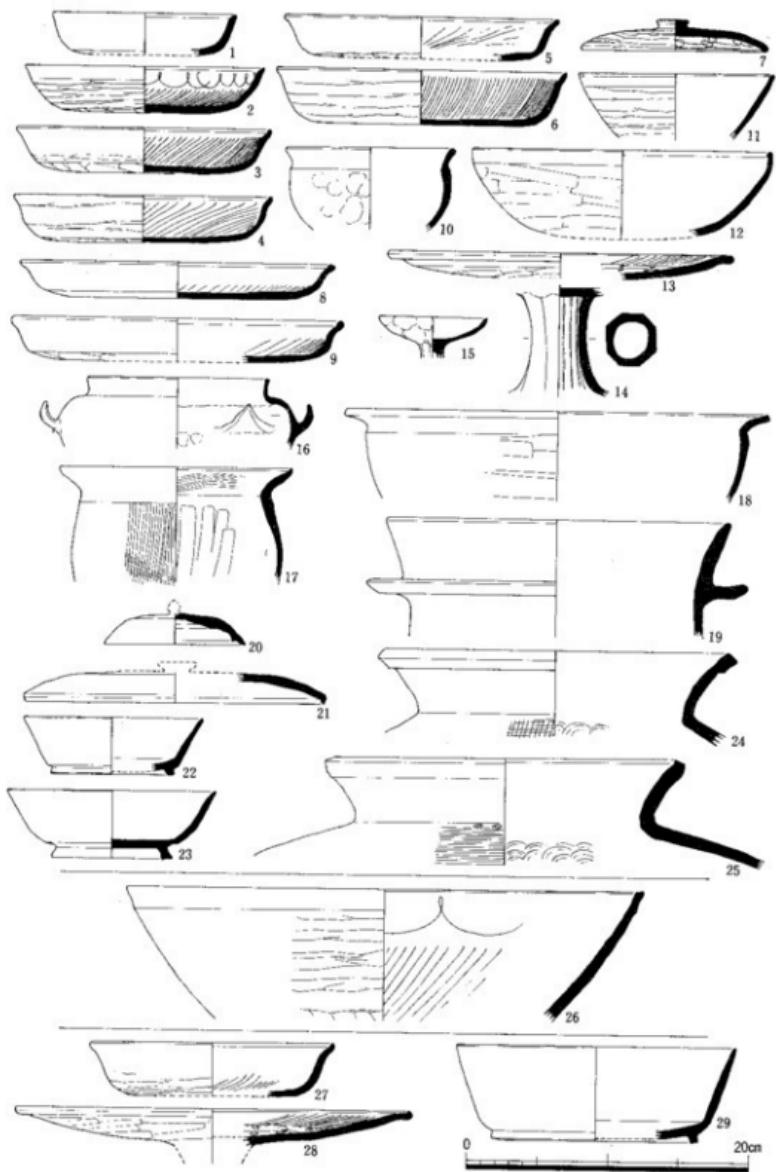


図-23 奈良時代の土器(1) (上 溝4・土塙6、中 上塙7、下 土塙1)

須恵器・杯は断面台形の高台の付くもので、高台の低いもの(22)と高く端部が凹面をなすものの(23)がある。杯蓋は無高台の小形杯のもので、宝珠つまみ、内面にかえりがある(20)。

20は7世紀中葉、その他は8世紀前葉～中葉の土器である。

土塙7出土の土器 (図-23)

土師器では楕、皿、盤(26)、甕、羽釜、須恵器では杯蓋、平瓦が出土している。いずれも小片。

土師器・皿は口縁端部を巻き込むもの。楕は高台が付く。26は外面ミガキ調整、内面放射暗文十連弧文。丁寧なつくりのため盤とした。須恵器・杯蓋は内面にかえりが付く。

土塙1出土の土器 (図-23)

土師器には杯、高杯、須恵器には杯があり、丸瓦も出土している。

土師器・杯は口縁端部をわずかに巻き込み、口縁部外面ナデ+粗いミガキ調整、底部ケズリ調整、内面は螺旋+1段放射暗文(27)。高杯は外面ケズリ調整、内面螺旋+放射暗文(28)。須恵器・杯は深い器形に低い高台が付く(29)。土師器は淡褐色を呈す。8世紀前葉～中葉のもの。

溝1・2出土の土器 (図-24)

土師器には杯、楕、高杯、甕(41)、羽釜、須恵器には杯、杯蓋、壺(42、43)、擂鉢(44)などがある。墨書き器片も出土しているが、判読はできない。

土師器・杯は口縁部外面ミガキ調整、2段の放射暗文をもつ丁寧なつくりもの(30)。楕は小さな平底で口縁端部を内傾させて段をつくり、外面ナデ調整、1段放射暗文のもの(31)。

須恵器・杯は小形無高台のもの(32、33)、外方に踏んばる台形の高台をもつもの(39、40)がある。杯蓋にはつまみの付かないもの(34、35)と付くもの(36～38)がある。

溝1・2出土の土器は7～8世紀前葉のものを中心にし、中葉以後のものを含まない。

包含層2出土の土器 (図-24)

土師器では杯、杯蓋、皿、鉢、高杯、甕、須恵器では杯、杯蓋、甕、壺、小形短頸壺(52)、擂鉢(53、54)などが出土している。小片のものが多い。

土師器・杯の45は口縁端部をわずかに巻き込み、口縁部外面ミガキ調整、内面2段放射暗文。46は磨滅が著しく、口縁部外面ナデ調整、内面は不明。皿は口縁部外面ナデ、底部ケズリ調整、わずかに放射暗文がみえる(47)。高台の付くものもある。鉢は口縁端部を内傾させて段をつくり、外面は粗いミガキ調整、内面は2段放射暗文(48)。色調は灰白色～淡褐色。

須恵器・杯は断面台形の高台の付くもの(51)。杯蓋は偏平な宝珠つまみをもつかえりのないもの。壺には広口壺、長頸壺がある。

包含層2出土の土器は7～8世紀前葉のものである。

包含層1出土の土器 (図-24、25、26)

土師器には杯、杯蓋(72)、楕、皿、盤、甕、羽釜、ミニチュア土器(76、77)、須恵器には杯、杯蓋、皿、短頸壺蓋(98)、小形平瓶(水差し)(99)、瓶子(101～103)、鉄鉢(104)、広口壺(100)、

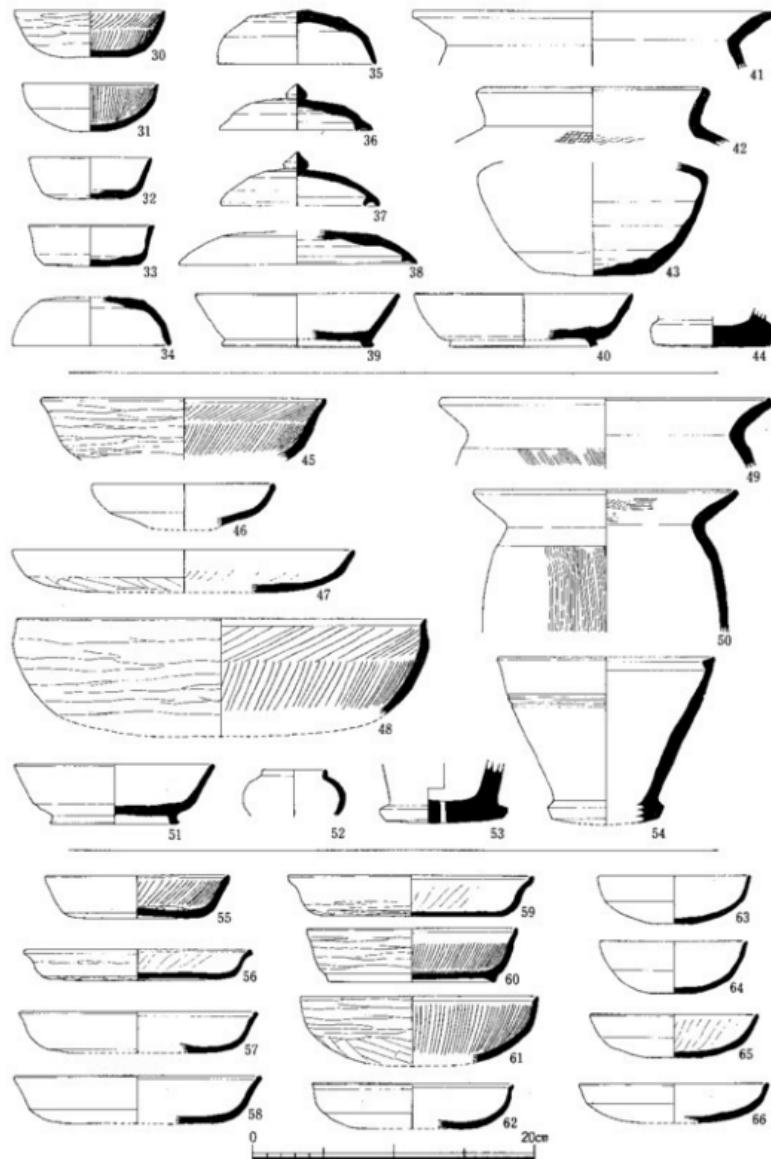


図-24 奈良時代の土器(2) (上 溝1・2、中 包含層2、下 包含層1)

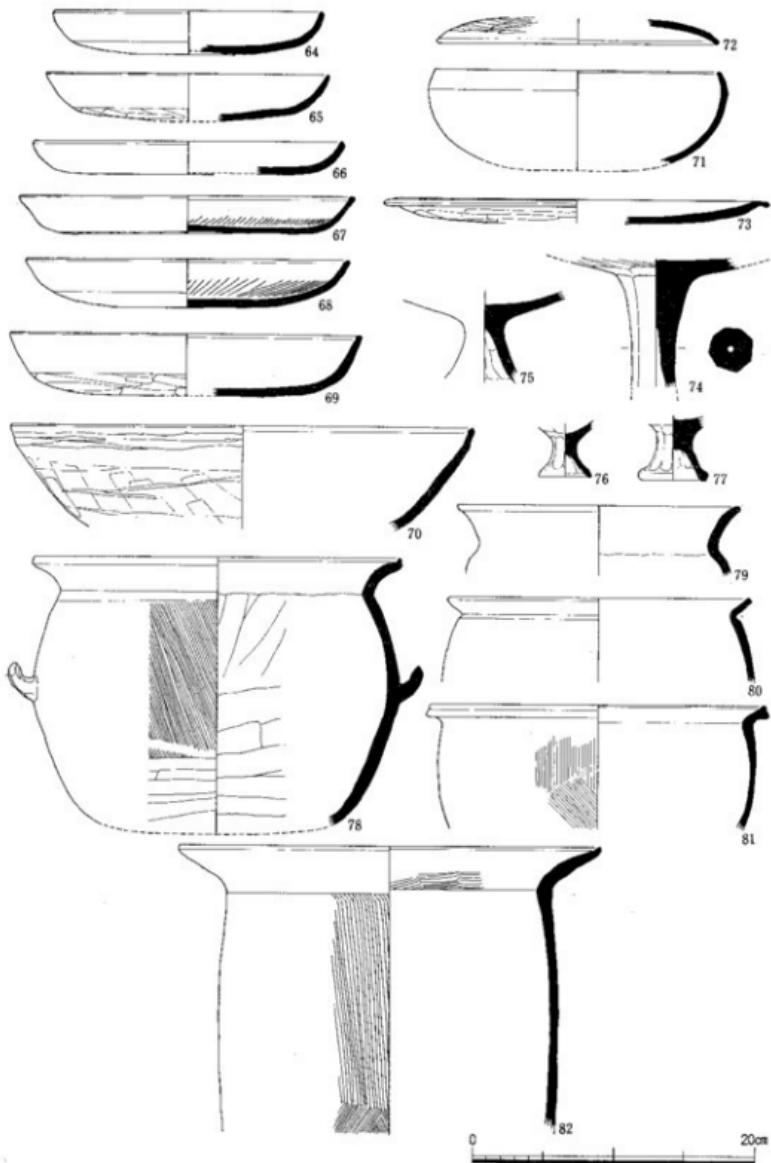


図-25 奈良時代の土器(3)

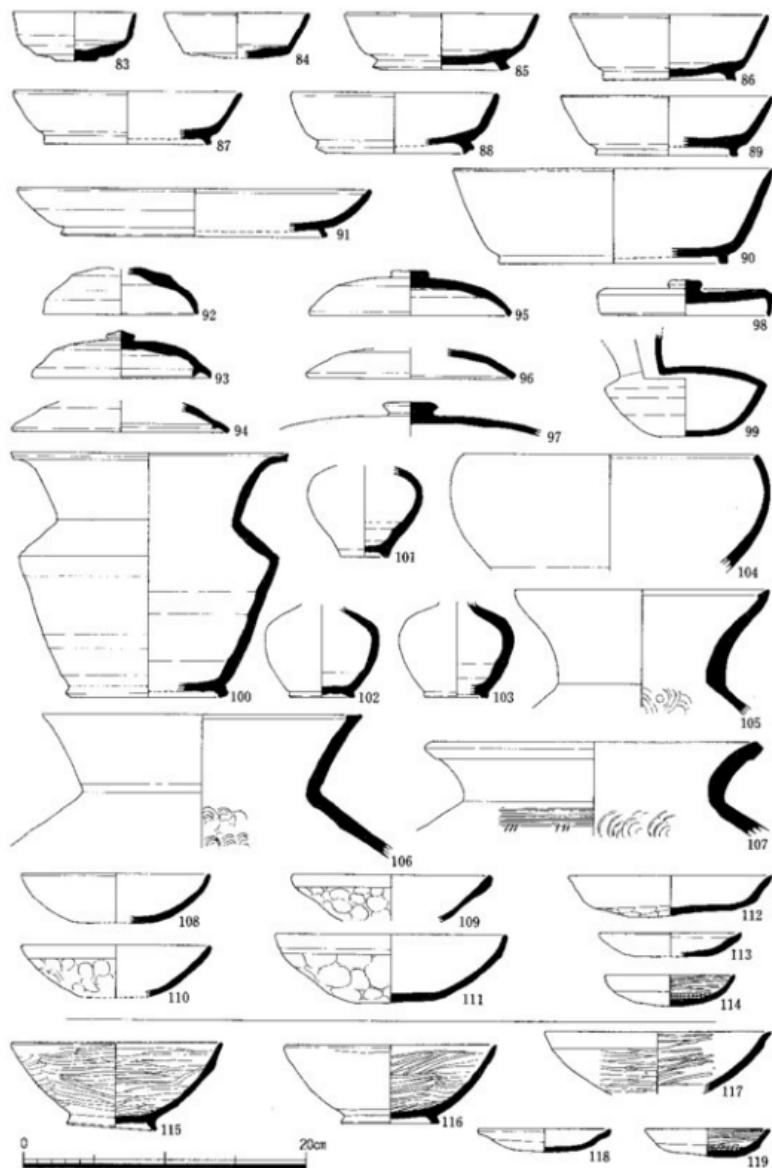


図-26 奈良時代の土器(4)、平安時代の土器(上：包含層1、下：土塙4、5、井戸1)

盃(105、106)、甕(107)などがあり、他に縁種・椀が出土している。出土量はコンテナ30箱程であるが、ほとんど小片のため図示できるものは少ない。

土師器・杯のうち口縁部が外傾する浅い器形は、口縁端部が直口のもの(55)とわずかに巻き込むもの(56~59)とがある。前者は口縁部外面ナデ調整、内面螺旋+1段放射暗文、後者には口縁部外面ナデ十粗いミガキ調整、内面螺旋+1段放射暗文のものと暗文のみられないものとがある。高台の付く器形は口縁部外面ミガキ調整、内面螺旋+1段放射暗文(60)。口縁部が直立しやや深い器形は、口縁端部を内傾させて段をつくり、口縁部外面ミガキ、底部ケズリ調整、内面1段放射暗文のもの(61)、口縁端部をわずかに外反させて段をつくり、内外面ナデ調整のもの(62)、口縁端部は直口で内外面ナデ調整のもの(66)、1段放射暗文のもの(65)がある。

椀は内外面ともナデ調整(63、64)。皿には口縁端部が直口のもの(64~66)とわずかに巻き込むもの(67~69)があり、前者は口縁部外面、内面ナデ調整、後者は口縁部外面ナデ調整、内面に螺旋+1段放射暗文のみられるものとみられないものとがある。盤の口縁部外面はミガキ、体部はケズリ十粗いミガキ調整、内面ナデ調整である。高杯には脚部の面取りが行なわれるものと行なわれないものとがあり(74、75)、杯部内面には暗文がみられないものがある(73)。甕には長胴のもの(82)と球形のものがある(78)。全体に淡褐色~赤褐色を呈し、灰色系は少ない。

須恵器・杯は小形無高台のもの(83、84)、高台の付くもの(85~90)があり、いずれも断面台形で外方に強く踏んばるものが多い。皿にも高台が付く(91)。杯蓋にはつまみの付かないもの(92)、つまみが付いて内面にかえりのあるもの(93、94)、かえりのないもの(95~97)がある。

包含層1は各時代の遺物を含むが、8世紀中葉以降の遺物が中心になる。

7. 平安時代の土器

包含層1出土の土器（図-26）

土師器・椀(108~111)、皿(112)、小皿(113)、羽釜、瓦器・椀、皿(114)などが出土している。

土師器・椀は内外面ナデ調整のもの(108)、外面口縁部ナデ調整、体部に指頭痕を残し内面ナデ調整するものがある。皿、小皿は内外面ナデ調整。羽釜は球形体部のもの。瓦器・皿は外面ナデ調整、内面は丁寧なミガキ調整で内底面に格子状暗文を施す。

108は8世紀末葉の長岡京期のものであり、その意味では広義に奈良時代のものか。109~111は9世紀末葉~10世紀初葉、112、113は11世紀末葉~12世紀初葉。

土塙4、5、井戸1出土の土器（図-26）

土塙4出土の瓦器・椀(115、116)は断面台形の高台が付く。115は4分割?の外面ヘラミガキ、116は条線が残らない程丁寧に磨き込まれている。两者とも和泉型瓦器椀。

土塙5出土の瓦器・皿(119)は外面ナデ調整、内面ミガキ調整、内底面に格子状暗文がある。

井戸1出土の瓦器・椀(117)は外面口縁部ナデ調整、体部と内面はやや粗いミガキ調整。

115、116、118は11世紀末葉、119は12世紀初葉、117は12世紀前葉。

8. 屋 瓦 (図-27)

屋瓦は包含層1からコンテナ5箱程出土している。軒丸、平瓦はそれぞれ1点のみである。軒丸瓦は単弁8葉蓮華文軒丸瓦。瓦当径18.3cm、中房径4.8cm、周縁部は幅1cm、高さ0.8cm、外側は段をなす。中房部での瓦当厚3.2cm、弁中央での瓦当厚約2.7cm。中房、花弁ともに肉厚で、中房には1+4の蓮子がある。花弁は中央に綾をもち弁端は丸い。丸瓦部は瓦当上端に付く。接着法で粘土補充量は多い。淡灰色を呈し、砂粒が多く石英、雲母粒が目立つ。

軒平瓦は均整唐草文軒平瓦。瓦当幅5.2cm、内区幅2.5cm。外区には殊文を配す。曲線彫。

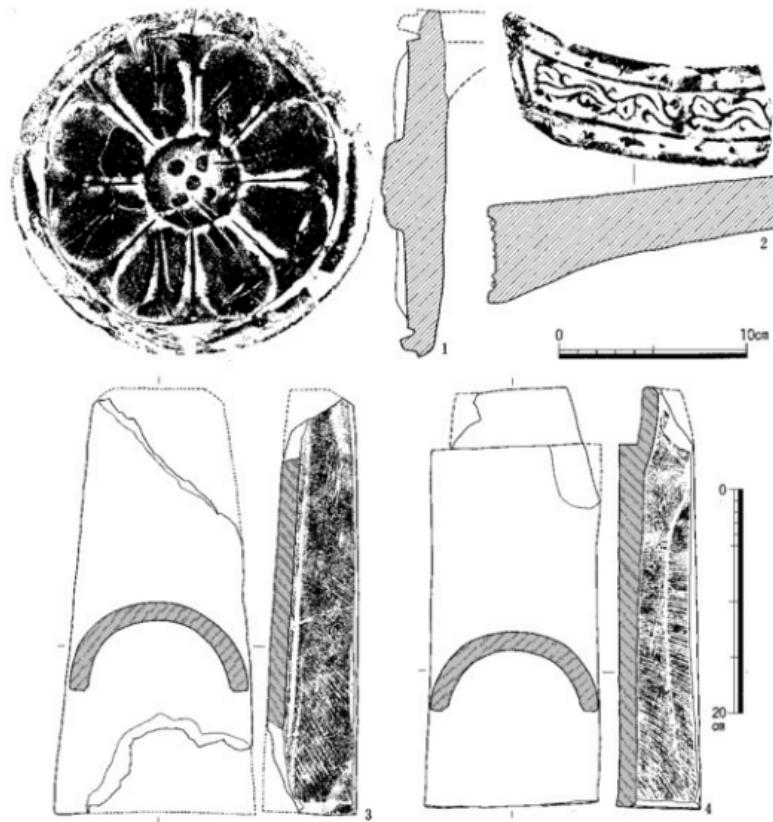


図-27 屋 瓦

黄褐色を呈し、胎土には砂粒が多く石英、雲母が目立つ。

丸瓦には行基葺のもの(3)と玉縁付のもの(4)とがある。平瓦の凸面にみられる文様から、印板には太い縄巻きのもの、細い縄巻きのもの、格子目をもつもの、有軸綾杉文をもつものがあることが解る。量的には縄巻きのものが多い。有文のものは凹面ナデ調整がみられる。

単弁8葉蓮華文軒丸瓦は、「河内六寺」といわれる柏原市域・東山々麓の寺院群では、創建時に用いられたものであり、しばしば出土している。本例と同范のものは家原寺跡(『柏原市史第四卷』1975年、『柏原市文化財概報 1984—I』1985年)から出土している。

9. 奈良時代の木製品 (図-28、29)

上塗6の多量の木片の中から木製品が出土している。断面図には本理を示す。

筒形木製品(10、11)は身の先縁を一直線にする形態。身から頭部に移る側縁は稜角をなし、身は撥形を呈す。柄の幅が末に向って狭くなるもの(10)とほぼ一定のもの(11)とがある。身の両面とも平坦である。11の柄の末にはわずかに段があり、頭部との境をなす。10は先縁幅3.3cm、現存長10.2cm、11は身幅3.3cm、長さ15.8cm。ヒノキか。

舟子形木製品(9、12、13)には身の先縁を一直線にする形態(9)、尖端部をつくる形態(12、13)とがある。9は身が短く、全長の約 $\frac{1}{3}$ である。身、頭部の側辺はわずかに稜角をなすがあまり明瞭ではない。12の身、頭部の側辺は稜角をなし、身と柄の区別が明瞭である。一方13は身、柄とともに幅広で、その区別は明瞭ではない。9、13は両面ともに平坦、12の身は断面形が凸レンズ状になる。9は身幅4.3cm、長さ34.6cm。12は身幅3cm、現存長27.3cm。13は身幅3.6cm、長さ26.8cm。ヒノキか。

箸(14~19)は小割した木片を棒状に整形したもの。多数出土しているが破損したものが多く、図示した6例は比較的全形を復元できるものである。また一端に向か細くなっているものが多く、本と末の区別も容易なものが多い。長さは20cm前後のものが多い。24は長さ24.5cmを測り、箸としては極めて長い部類に属す。ヒノキか。

蓋板(20)は円板状のもの。周縁部でやや厚くなっている。厚さ中央部で0.7cm、径17cm程に復元できる。曲物の蓋と思われる。スギか。

用途不明木製品(21~26)。21は板状の木片で一端がやや細くなっている。現存長8.6cm、最大幅2.8cm。ヒノキか。22は両側片の平行する木片で一端を尖らせている。現存長15.8cm、幅2.7cm。ヒノキか。23は一端を尖鋸に尖らせた木針状の木片で長さ15.8cm、幅1.4cm。ヒノキか。24は心持材を使い丸棒状に整形したもので、中央部では断面楕円形になる。工具などの柄であろう。現存長17.1cm。材質不明。25は心持材を用いた丸棒で、一端に径1mmの円孔が貫通する。現存長18.1cm。材質不明。26は1側縁に三角形の刺込みを入れたもの。現存長18.3cm、幅2cm、材質不明。

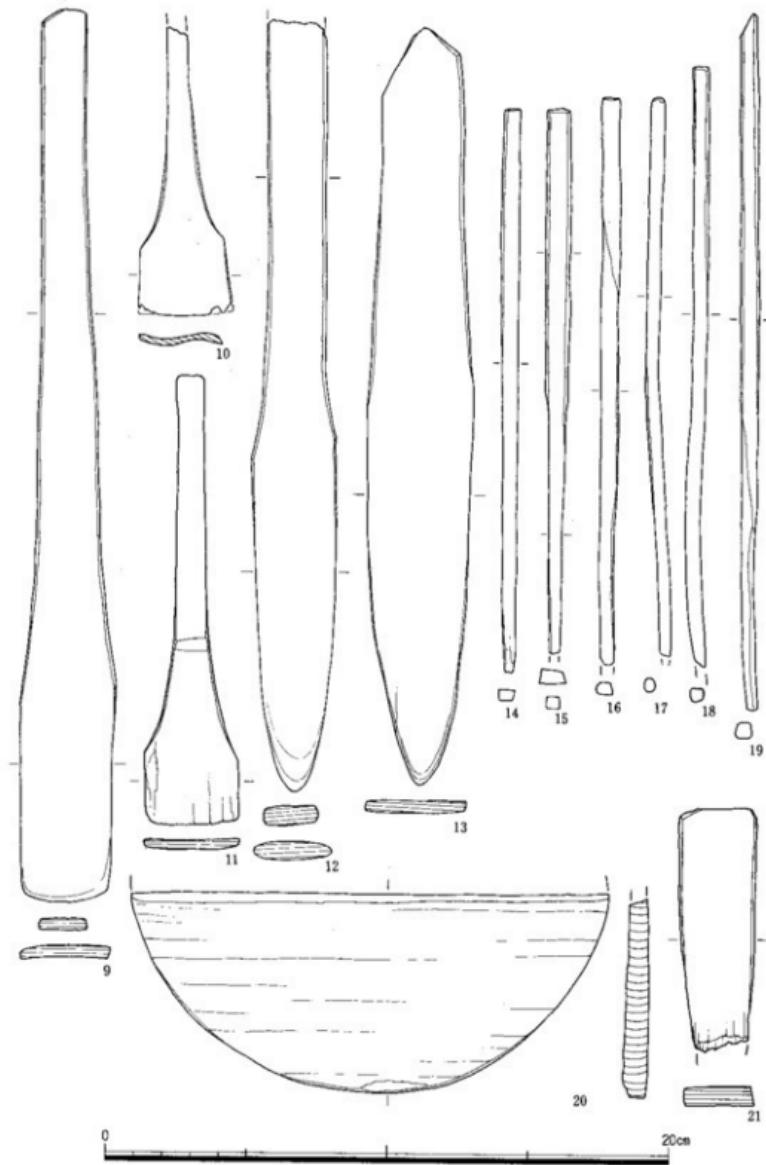


図-28 奈良時代の木製品(1)

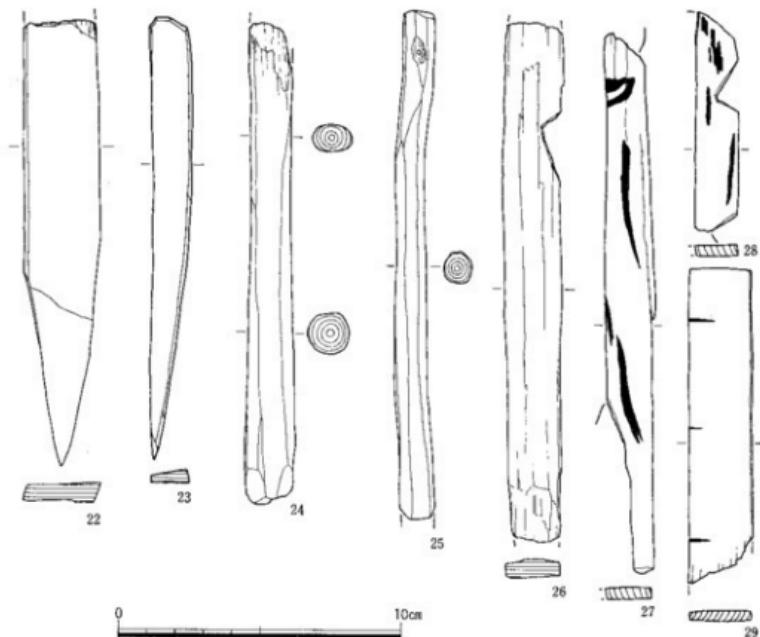


図-29 奈良時代の木製品(2)

人形(27、28)は扁平な正面全身人形。27は頭、胴・脚左半を欠くもので、右側縁には切り込みによって手が表現されている。現存長19.2cm、現存幅1.8cm。28は頭・胴右半が残るもので右側縁下に三角形の切り込みが残ることから、手が表現されない形態のものであろう。頭は墨によって表現されていたのであろう。現存長7.8cm、現存幅1.5cm。ヒノキか。

物指(29)。太く長い墨線と細く短い墨線とで目盛りを表現したもの。太線と細線の間隔は3.9cm。現存長11.2cm、幅2.3cm。ヒノキか。

10. 木簡(図-30)

土塙6の木片の中から出土したものである。内訳は文書木簡1点、荷札木簡4点、その他1点。材質はいずれもヒノキか。

1は長さ26.3cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmの短冊形。上端に径2mmの円孔がある。半損した状態で出土した。上縁は表裏から切込まれ、断面は△形を呈す。

(表) 九月一日進上車[]一両載稻六十束

(裏) 建麻呂持稻十束 合七十束 付飯万呂

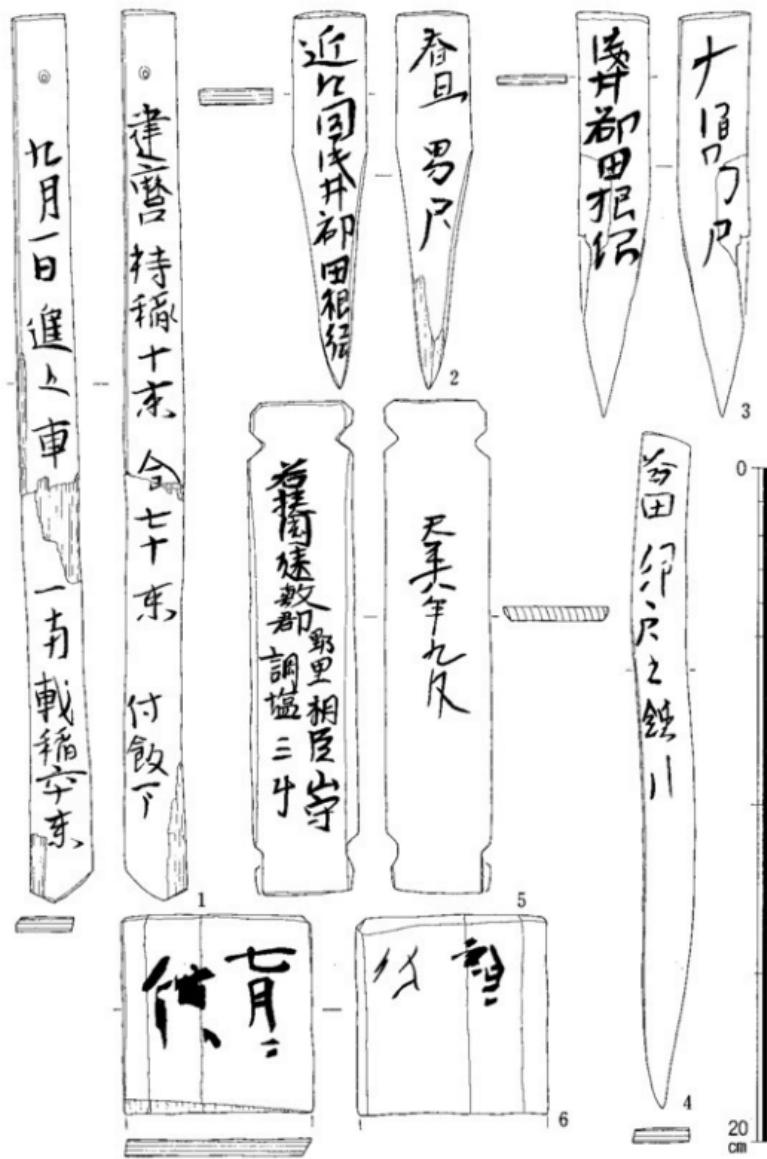


图-30 木 简

2は長さ11.2cm、幅2.2cm、厚さ0.4cmで一端が尖るもの。下半部では文字部分も切削されており、2次的に尖らせたものである。上縁は切込みを入れてから折られている。

(表) 近江国浅井郡田根郷

(裏) 春日部〔〕男戸

3は長さ12.1cm、幅2cm、厚さ0.5cmで一端が尖るもの。2次的に尖らされたかは不明。上縁は切込みを入れてから折っている。

(表) 浅井郡田根郷

(裏) □□□戸

4は長さ20cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmで一端が尖るもの。3同様2次的に尖らされたかは不明。上縁は側縁と同じく平坦面になっている。

益田郷戸主錦(部)□□〔〕

5は長さ14.2cm、幅3.1cm、厚さ0.4cmで、木筒を荷に縛るための切込みが上下の両側縁にみられる。左側縁下端をわずかに欠損する。

野里相臣山守

(表) 若狭国遠敷郡

調塩三斗

(裏) 天平十八年九月

6は長さ5.9cm、幅5.8cm、厚さ0.5cmで方形のもの。上縁は表裏面から切込まれ、断面は八形になる。下縁は切込みを入れた後折ってある。縦方向に2ヶ所割れる。表裏面合わせて3ヶ所以上剥離されており、判読は困難である。

(表) 七月(七)□ (裏) []

□ □

* 本簡の解説は奈良国立文化財研究所 鬼頭清明氏にお願いした。また、若狭国からの調塩荷札の文字は、平城宮出土の同種のものの一部と書体が酷似することである。

第5章 まとめ

1. 縄文、弥生時代の調査成果

縄文土器は早、中～晩期のものが出土し前期のものは出土していない。柏原市域ではこれまで縄文前期の土器は出土しておらず、今回の調査地においても同様の傾向を示していた。生駒西麓地域では、前期に限ってみた場合、八尾市恩智遺跡を集落立地の南限としているようだ。晩期では船橋、長原式土器が出土しており、縄文時代の最終末期まで生活の痕跡を辿ることができるが、弥生時代までは継続していない。

弥生時代は、出土した土器からみて中期後半から集落が形成されたものと考えられる。造構としては、大量の砂で埋め尽された東西方向の2本の溝と、土器を埋置した土塹がある。調査地西方には大和川、あるいは大和川の氾濫原が真近に迫っていたものと考えられ、調査区北半も常に流水の影響下にあったものとみられる。したがって集落の居住域は調査区よりも東方の高地にあったものと考えたい。

調査区中央部を西流する溝は、黒色粘質土の発達や自然木の遺存状況からみて、樹木に覆われた比較的水量の少ない自然流路であったと思われる。この溝には土器、石器以外にも鋤、鍬、櫂などの生活資材が投棄されていた。調査地周辺は大和川と生駒山系南端の東山山地とに挟まれ、低平地は極めて狭小である。しかし石庵丁などを含め農耕具が出土しており、集落を維持しうる一定規模の農耕が行なわれていたとみられよう。鍬は焼失している部分があり、集落あるいは個々の住居が火災にあったことを示している。

大和川を挟み対岸にはこの地域の拠点的な集落と考えられる国府、船橋などの集落が営まれている。また大和川を下れば河内平野中央部の諸集落、大阪湾沿岸部にも容易に連絡することが可能である。調査地から諸集落、諸地域への連絡は、地形環境からみて河川が大きな障害になっているが、反面舟運ということを考慮すれば、大和川を中心とする諸河川は重要な交通手段であったろう。今回の調査区で検出された自然流路は、調査地から大和川へ通じ、さらに多くの地域へと連絡する水上の道の一部とも考えられる。そうした意味で、櫂が出土したことは交通手段としての小形船の利用を示すものであり、調査地東方に営まれた集落が、他の集落や大阪湾岸部と頻繁に通交していたことを物語っている。

今回出土したサスカイトには、自然面の状態からみて転石状のものが多く、石核をみてもかなり小形の原材が用いられている。上山のサスカイト露頭から直接採取したものではなかろう。一方石庵丁の素材である綠泥片岩は板状のものが集落に持ち込まれている。数枚の剝離痕がみられ石核と考えられる。さらに石庵丁には未製品も存在する。石庵丁は製品が集落に持ち込まれたのではなく、原材が持ち込まれ、集落内で製品化、使用されたものである。

2. 奈良・平安時代の調査成果と智識寺

溝4、土塙6からは、天平18年(746)と墨書きされた木簡とともに多数の土器が出土している。この中最も新しく且つ出土量の多い土器は、いわゆる杯Aとされる浅い器形のものである。口縁端部を巻き込み、口縁部外面ヨコナデ+粗いミガキ調整、体部ケズリ調整、内面に螺旋+1段放射暗文がみられることを特徴とする。平城宮跡の調査では平城宮Ⅲ期として相対年代を与えられている土器であり、天平18年銘のある木簡などとともに出土し、暦年代750年を中心とする8世紀中葉のものとされている。今回の調査成果も、こうした編年観を裏づけるものであった。

掘立柱建物1、2は2間×4間の規模をもつ南北棟の建物で、その位置はわずかにずれるものの重なり合っている。この点からは両者は同様な性格をもった建物であり、建物2は1の建替であったと考えられる。その時期は、柱穴掘方内の遺物等からは判断できないが、わずかな空間をもってその西側に位置する土塙6との関係に注目し、二義的に推定しておきたい。

土塙6は稻鉗、手斧等の削片を単時間に投棄した結果埋没した土塙であり、その性格は建築不要材の廃棄地であった。土塙6は、土器等の生活資材廃棄溝であった溝4掘削後、大量の不要になった木片を処理するために溝4内に新たに掘削されたものであり、木片の中に天平18年銘の木片が混在している点などを勘案すると、こうした建築不要材は746年以降、8世紀中葉の土器が使用、廃棄されている間に廃棄されたことになる。後述するように木簡は調に付された荷札であり、調査地にもたらされるまでに一定の年限を要したとすれば、その廃棄年代はほぼ750年～760年の間に限定されよう。ここでは、建物1から2への建替の際に不要になった建築材が土塙6に廃棄されたものと考え、建替時期を750年～760年間に想定しておく。そして、この建替は2つの建物に規模や位置の変化がない点から、建物1の自然腐朽が要因であったと思われる。従って掘立柱建物の存続年限を考慮すれば、建物1は少なくとも8世紀前葉には存在したことになる。

出土した木簡は1の文書木簡を除き2～4は近江国、5は若狭国からの租税に付された荷札木簡であった。本来は平城宮において廃棄されるべき荷札木簡が調査地に遺存している事実は、平城宮に納められた荷が、荷解きされることなしに諸国からの荷札を付けたまま調査地にもたらされたことを意味している。調査区あるいは周辺には公的な荷材を扱うべき性格をもった施設が存在したものと考えられる。

こうした点からすれば、調査地から租税の荷札木簡を出土した背景に、文献資料から知られる限り「智識寺」あるいは「智識寺南行宮」を想定することができよう。前者は7世紀代に庶民の合力によって建立された寺院で、奈良時代には聖武、孝謙帝がしばしば参詣し、東大寺虚空蔵菩薩造像の機縁ともなった名刹である。後者は孝謙帝が智識寺、「河内六寺」参詣のために、749年～756年の間に造営した行宮であった。木簡の付された租税の荷が平城宮から智識寺へも

たらされたものか、あるいは智識寺南行宮へもたらされたものか、考古学的には論議は進められない。しかし今回検出された建物は、柵で西縁を区切られた敷地の一部から租税に付された木筒を出土している点からみて、庶民の住居、もしくは有力者の邸宅等ではなく、しかも8世紀前葉にはすでに建てられていたという年代からすれば、智識寺の付属施設として捉えることが妥当なようと思われる。また、6点の木筒が建物1、2に付随するものなのか、別に周辺の諸施設から発見されたものなのかを考察することは、その歴史的背景に智識寺、智識寺南行宮を想定するための重要な論拠になる。これは調査地周辺の発掘調査が行なわれた時に、改めて論議されるべき問題であり、今回の調査成績から判断することはできない。

柏原市域における生駒山系の西麓部は、都が平安京に移ると畿内の中心部から遠隔の地となり次第に衰微したといわれる。智識寺は、

貞觀五年(863) 新銭を鋳造各寺に施入、智識寺に二〇貫を施入する（三代実録）

貞觀八年(866) 河内守菅野豊持修理智識寺仏像別當となる（三代実録）

長元二年(1030) 藤原頼通智識寺に參詣する（日本紀略）

などの文献記事を残し、一定の繁栄を保っていた。しかし、

応徳二年(1086) 六月十六日智識寺倒壊する（校本扶桑略記）

の記事を最後に文献に載ることはなく、平安時代末葉～鎌倉時代には廃寺と化したものと思われる。今回の調査で出土した遺物は、土塙から出土した12世紀前葉の遺物を最後に、鎌倉～室町時代へと到る中世の遺物は極端に少なくなる。おそらく、調査地周辺は智識寺の盛衰と命運をともにした地域だったのであろう。

※文献史料は『柏原市史 第四卷』(1975) から抜粋した。

(追記)

脱稿後、奈良国立文化財研究所 光谷拓実氏から土塙6出土の木材2点について年輪年代の報告を受けた。資料は樹皮、辺材部のない心材部からなるもので、A.D. 579+ α 年、A.D. 629+ α 年という年代が測定された。また、平城宮出土の資料と良く類似した年輪変動パターンを示すとのことである。

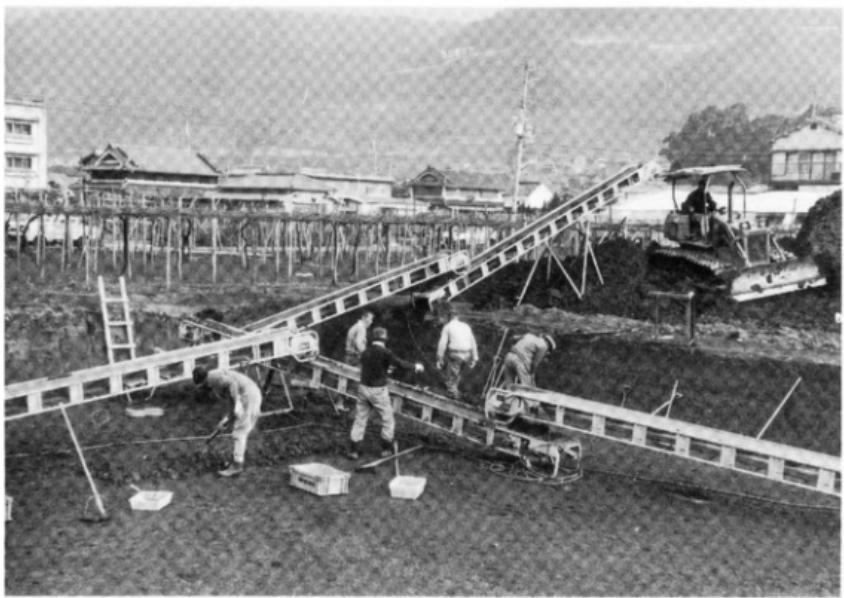
土塙6は土器、木筒からみて8世紀中葉のものであるが、そこから出土した木材の年代とのすれば、木材が心材部で最終伐採年を示さないという資料の特性によるものである。

図 版

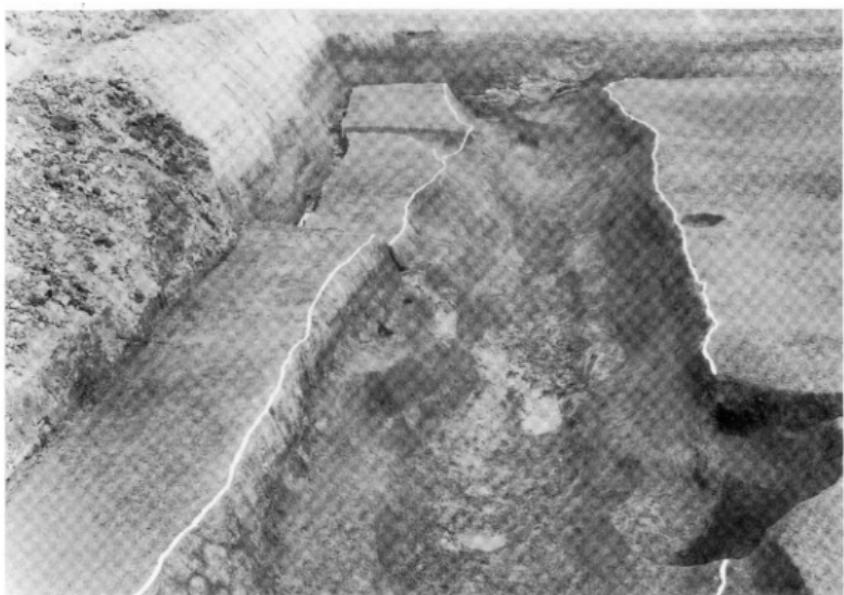
図版一
調査地全景



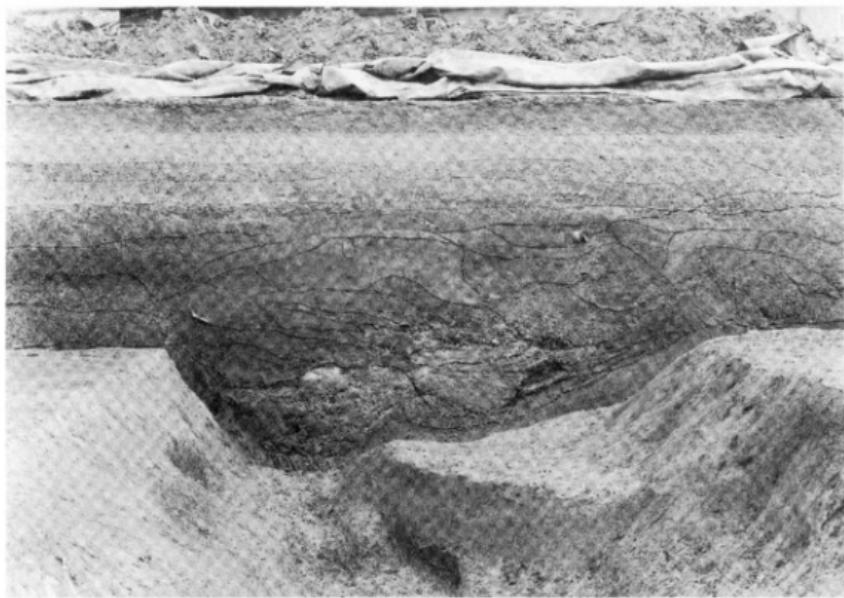
調査地を西上空よりみる



調査状況

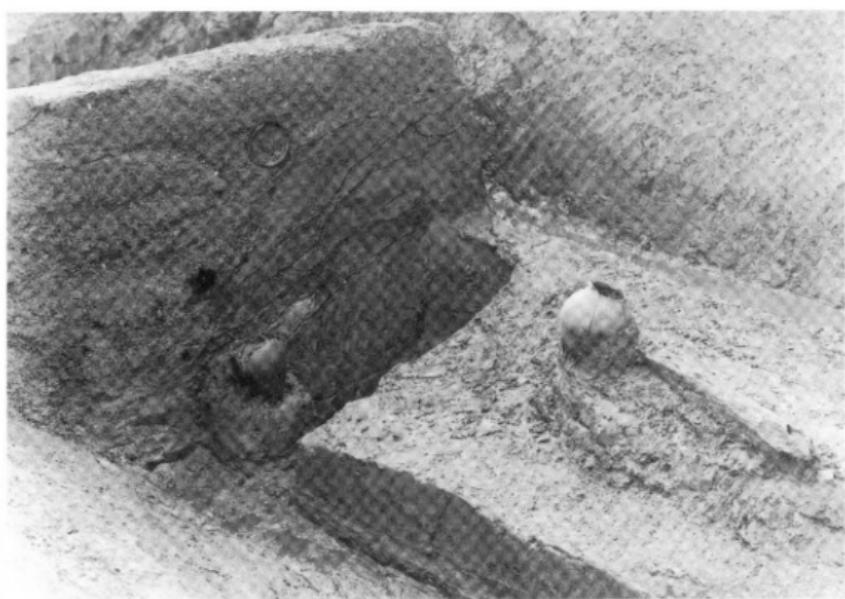


溝3(西から)

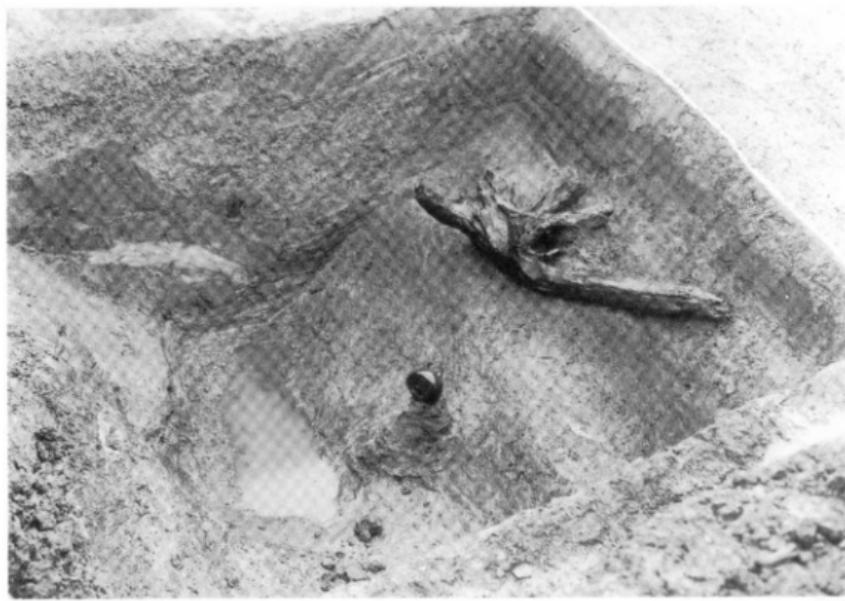


溝3堆積状況(西から)

図版三
弥生時代の遺構



溝 3



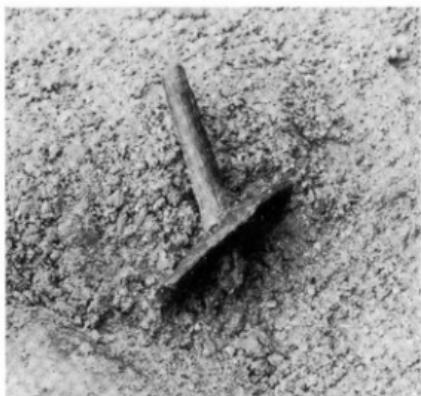
溝 3



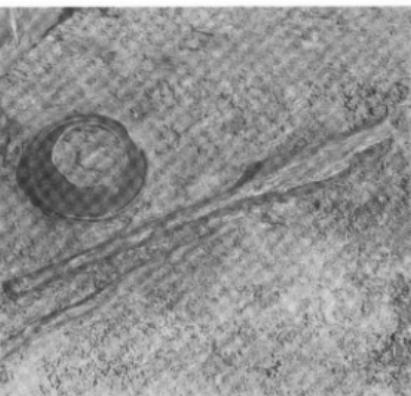
溝3、溝7



溝3



溝3



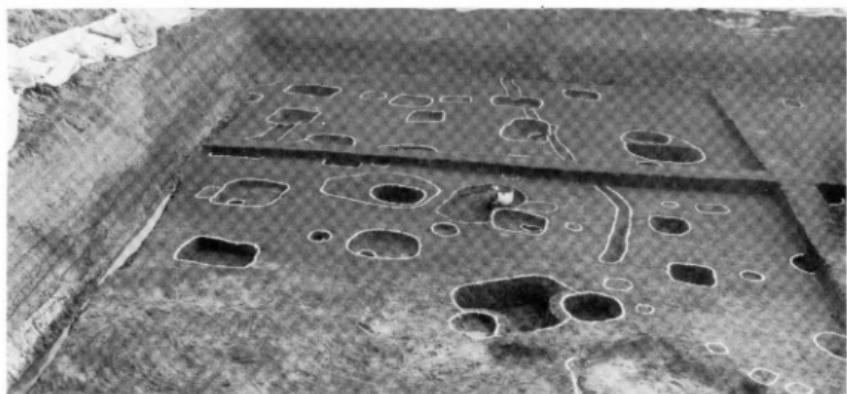
溝3



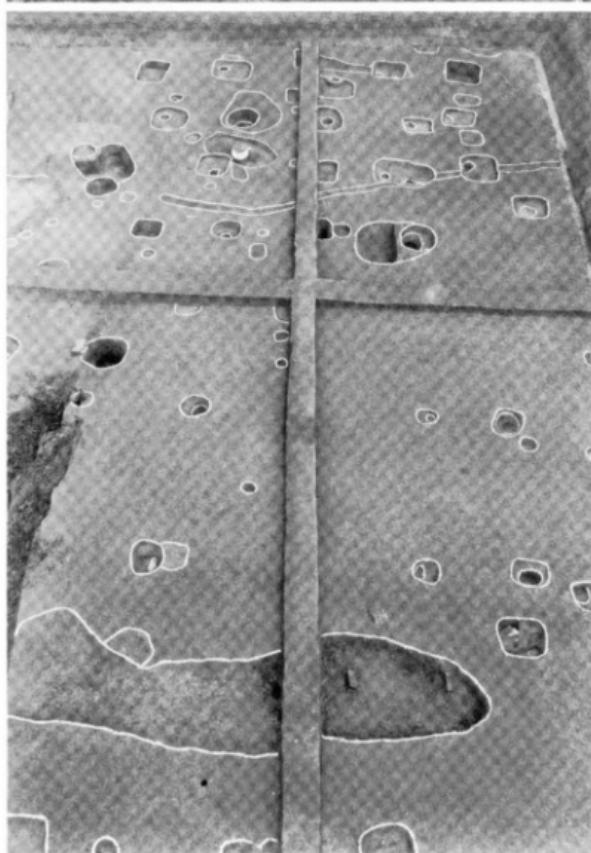
土塗9



土塗11



調査地東南部(北から)



調査地南部(西から)

図版六 奈良・平安時代の遺構



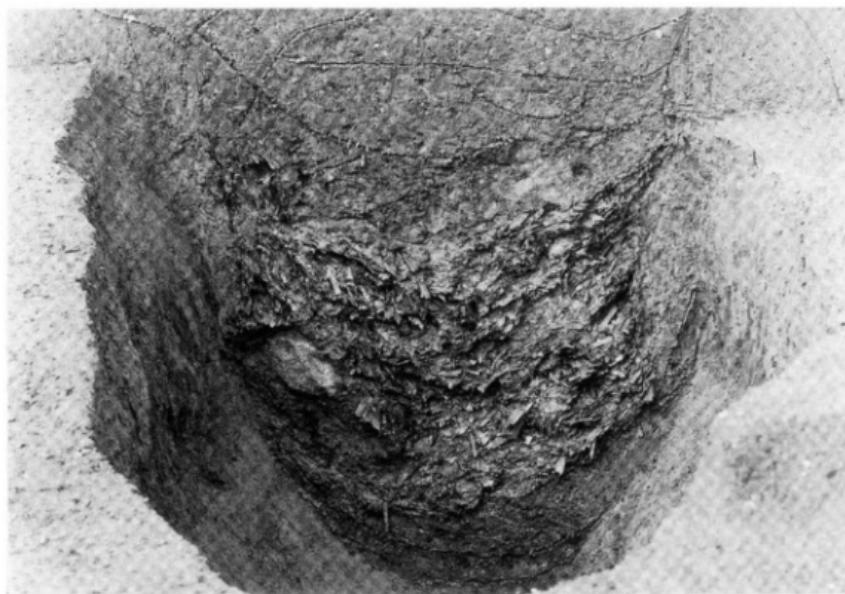
溝1(西から)



土塹1(西南から)

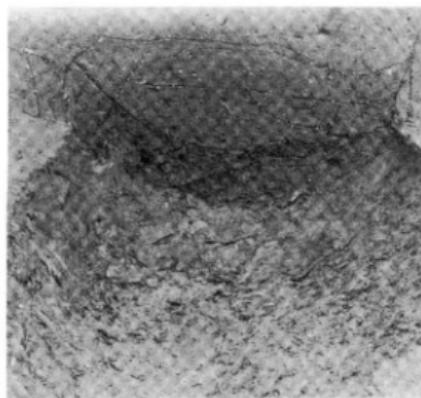


土塚6 調査状況

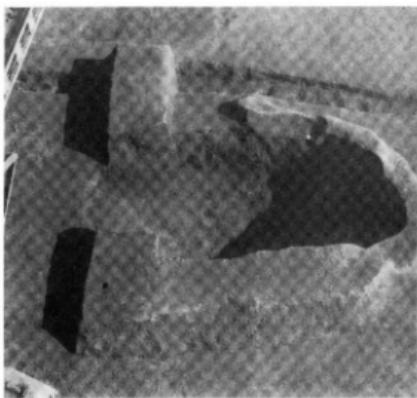


土塚6 木片の堆積状況

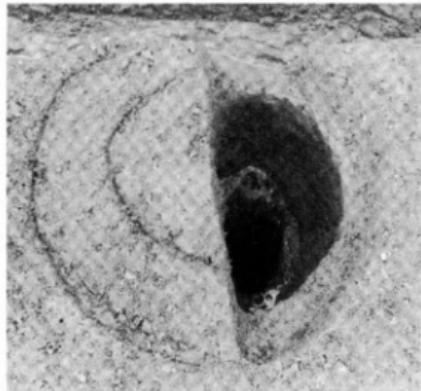
図版八 奈良・平安時代の遺構



土塚 6 木片層上面



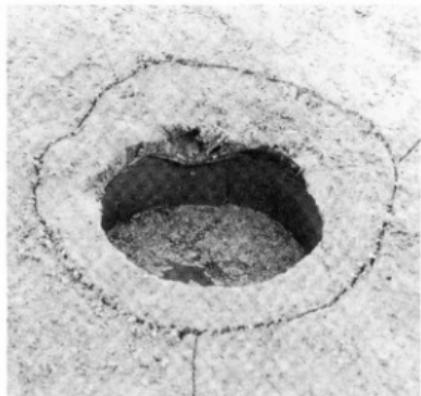
土塚 6 全景(西から)



柱列柱痕



柱列柱痕



井戸 1



井戸 2



図版一〇 弥生、古墳時代の土器



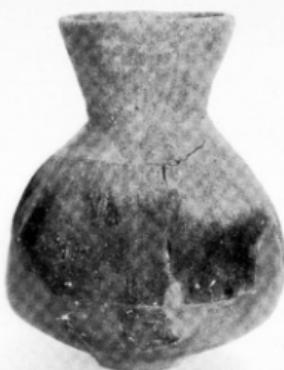
32



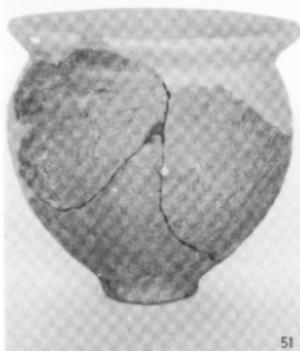
53



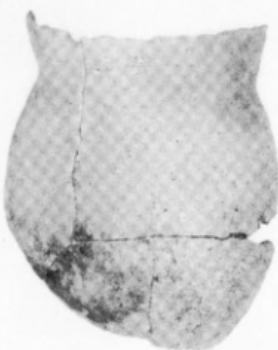
45



48



51



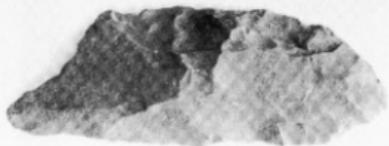
4



3



22



24



23

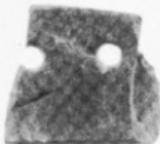
複刃削器（刀器）



32



31



30

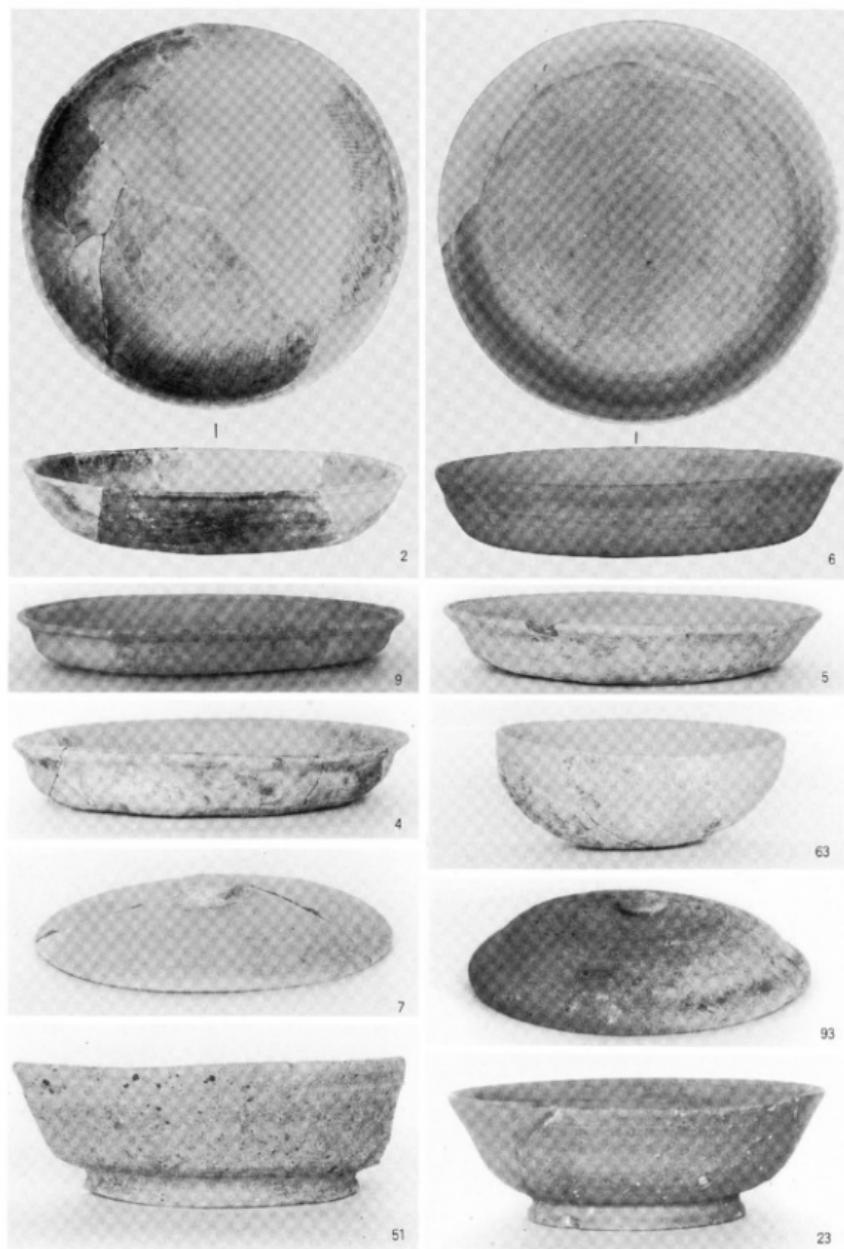


29

石庵丁

図版一二 弥生時代の木製品

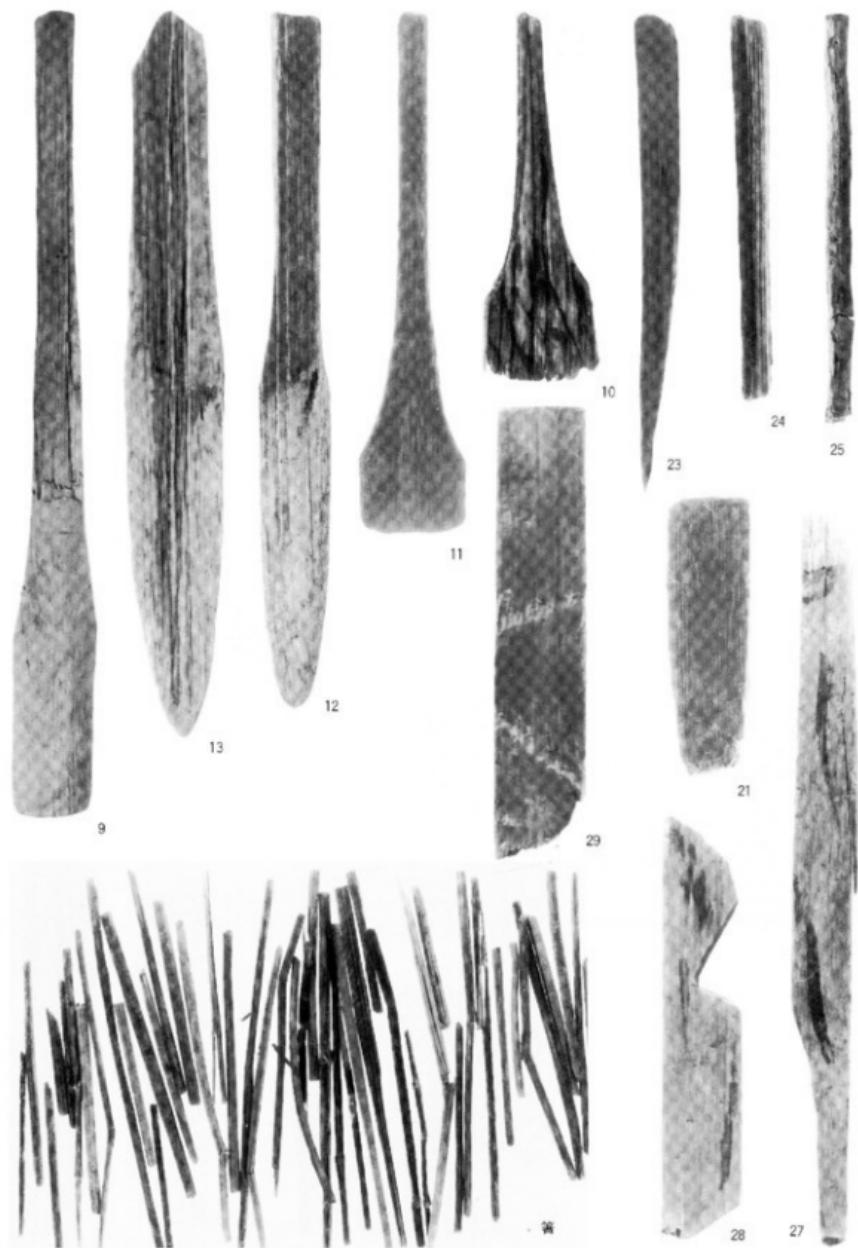




図版一四 奈良・平安時代の土器、屋瓦



図版一五 奈良時代の木製品

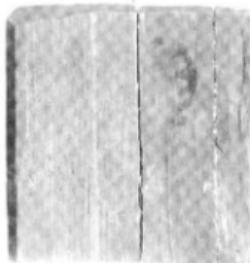
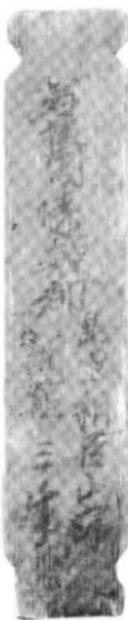


著

圖版一六 木 簡

九月一日進上草
一束
一方載稻
李牙

建
雪
特
種
十
束
今
七十束
行
飯
下



安 堂 遺 跡

1986年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1-43

電話 (0729) 72-1501 (内) 716

発行年月日 昭和62年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

